



Cisco Prime Collaboration Deployment 機能

- Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項 (1 ページ)
- ネットワーク アドレス変換のサポート (4 ページ)
- アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク (5 ページ)
- 輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス (10 ページ)
- サポートされる ESXi サーババージョン (11 ページ)
- クラスタ インベントリ (11 ページ)
- タスク管理 (20 ページ)
- 管理ツール (61 ページ)
- FIPS 140-2 の準拠 (75 ページ)
- 拡張セキュリティ モードのサポート (76 ページ)
- AES 経由の再暗号化 (78 ページ)
- サインインセッション数の制限 (79 ページ)
- 最小 TLS バージョンの制御 (79 ページ)
- クラスタの設定可能な最大インストールタイムアウト (80 ページ)

Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項

Cisco Prime Collaboration Deployment を使用すると、ユーザはインベントリ内のサーバ上でタスク（移行やアップグレードなど）を実行することができます。

手順	タスク
ステップ 1: インベントリの作成	<p>タスクを実行するには、まずインベントリ内にクラスタが存在する必要があります。すでに UC アプリケーションを実行している UC クラスタをインベントリに追加するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] > [ディスカバリ クラスタ (Discovery Cluster)] 機能を選択します。</p> <p>既存のクラスタを新しい仮想マシンに移行するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] > [移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)] を選択します。(移行タスク (21 ページ) を参照)。</p> <p>新しいクラスタをインストールするには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] > [新しい UC クラスタの定義 (Define New UC Cluster)] 機能を選択します。(インストールタスク (51 ページ) を参照)。</p> <p>既存のクラスタから新しい仮想マシン クラスタに移行する場合または新しいクラスタをインストールする場合は、最初に、それらの仮想マシンを含む ESXi ホストをインベントリに追加する必要があります。ESXi ホストを追加するには、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)] を選択します。(ESXi ホスト サーバの追加 (15 ページ) を参照)。</p>

手順	タスク
ステップ 2: タスクの作成	<p>インベントリ内のクラスタ上で操作を実行するためのタスクを作成できます。タスク作成時にオプションで以下のことを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • クラスタの選択 <p>(注) このタスクは、必要なクラスタのタイプによって異なります。たとえば、検出されたクラスタまたは移行クラスタを選択することがあります。</p> • タスクを実行するタイミングの決定 • タスクを個別に実行するか、手順間で一時停止するか決定します。 <p>次のいずれかの操作を実行するには、以下の手順を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 既存のクラスタから VM マシンの新規クラスタに移行するには、移行タスク (21 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタの Unified Communications Manager バージョンをアップグレードするには、アップグレードタスク (35 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタのバージョンを切り替えるには、バージョン切り替えタスク (42 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタを再起動するには、サーバ再起動タスク (45 ページ) を参照してください。 • 既存のクラスタ内の 1 つ以上のサーバのホスト名または IP アドレスを変更するには、再アドレス付けタスク (47 ページ) を参照してください。 • VM マシンから新規 UC クラスタを作成するには、インストールタスク (51 ページ) を参照してください。
ステップ 3: タスクのモニタ	<p>タスクが作成されたら、[モニタリング (Monitoring)] ウィンドウでタスクを表示または追跡できます。このページでは、タスクをキャンセル、一時停止、または再開することもできます。</p> <p>作成したタスクを表示するには、タスクステータスのモニタ (59 ページ) を参照してください。</p>
ステップ 4: 管理タスク	<p>電子メール通知を設定できます。「Eメール通知」を参照してください。</p>

ネットワーク アドレス変換のサポート

Cisco Prime Collaboration Deployment では、ネットワーク アドレス変換 (NAT) がサポートされています。次の状況では Cisco Prime Collaboration Deployment を使用できます。

- Cisco Prime Collaboration Deployment がローカル ネットワークまたはプライベート ネットワーク内にあり、アプリケーション ノードが NAT の後方にある場合。
- Cisco Prime Collaboration Deployment が NAT の後方にあり、アプリケーション ノードがプライベート ネットワーク内にある場合。

NAT の後方にあるアプリケーション ノードをサポートするため、Cisco Prime Collaboration Deployment はプライベート IP アドレスと NAT IP アドレスを追跡します。導入ノードの NAT IP アドレスとアプリケーションを指定するには、Cisco Prime Collaboration Deployment を使用します。Cisco Prime Collaboration Deployment は NAT IP アドレスを使用してアプリケーション ノードと通信します。ただし、platformConfig.xml ファイルを使用してノードを設定する場合、ノードはそのプライベート アドレスを使用します。

NAT の後方にある Cisco Prime Collaboration Deployment の設定

Cisco Prime Collaboration Deployment が NAT の後方にあり、アプリケーション仮想マシンまたは ESXi ホストと通信する場合、この通信は NAT IP アドレスを使用して行われます。



- (注) Cisco Prime Collaboration Deployment が NAT の後方にあり、アプリケーション ノードがプライベート ネットワーク上にある場合、アプリケーション ノードは NAT IP アドレスと通信します。

Cisco Prime Collaboration Deployment の NAT IP アドレスを設定するには、[管理 (Administration)] メニューの[NAT 設定 (NAT Settings)] ウィンドウを使用します。このウィンドウで入力した NAT IP アドレスは、GUI の他のウィンドウには表示されません。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [NAT 設定 (NAT Settings)] を選択します。

[NAT 設定 (NAT Settings)] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、ホスト名とプライベート IP アドレスが事前に取り込まれています。

- ステップ 2** [NAT IP] フィールドに NAT IP アドレスを入力します。

- ステップ 3** [保存 (Save)] をクリックします。

NAT IP アドレスは、Cisco Prime Collaboration Deployment のコンフィギュレーション ファイルのエントリとして保存されます。このエントリは、アプリケーション ノードが Cisco Prime

Collaboration Deployment との通信を試行するときに使用されます。その後アプリケーションノードはコンフィギュレーションファイルを読み取って NAT IP アドレスを取得し、その IP アドレスを使用して Cisco Prime Collaboration Deployment との通信を試行します。

- ステップ 4** (任意) [リセット (Reset)] をクリックします。
NAT IP アドレスが、以前に保存された NAT IP アドレスにリセットされます。

アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク

Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して、ユニファイドコミュニケーションアプリケーションのさまざまなタスクを実行できます。次の表に、Cisco Prime Collaboration Deployment が各アプリケーションに対してサポートしているタスクを示します。

- [Cisco Unified Communications Manager](#) に対してサポートされているタスク (セッション管理エディションを含む)
- [表 2 : Cisco Unified Presence](#) に対してサポートされているタスク (7 ページ)
- [表 3 : IM and Presence](#) サービスに対してサポートされているタスク (8 ページ)
- [表 4 : Cisco Unified Contact Center Express](#) に対してサポートされているタスク (8 ページ)
- [表 5 : Cisco Unity Connection](#) に対してサポートされているタスク (9 ページ)
- [表 6 : Cisco Emergency Responder](#) でサポートされるタスク (9 ページ)



- (注) 表内のリリースは、エンジニアリング スペシャル (ES) /サービス アップデート (SU) バージョンを指定していません。Cisco Prime Collaboration Deployment を介してアップグレードまたは移行が可能なサポートされている ES/SU バージョンを特定するには、IM and Presence、Cisco Unified Communications Manager、Unity Connection などの対応する製品のリリース ノートを参照してください。



- (注) Cisco Prime Collaboration Deployment は、アップグレードまたは移行の宛先バージョン 10.x 以降をサポートします。アプリケーションバージョン 10.x 以降は仮想化をサポートします。仮想マシン上の送信元バージョンが 8.x または 9.x の場合は、アップグレードタスクが 10.x 以降にアップグレードできます。ただし、MCS 上の送信元バージョンが 8.x または 9.x の場合は、アップグレードタスクがサポートされません。

クラスタ移行タスクは、MCS 7800 上か仮想マシン上かに関係なく、表内のリリースから仮想マシン上の 10.x 以降のバージョンに移行できます。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して Cisco Unified Communications Manager をリリース 12.0(1) からそれ以降のリリースに移行する場合は、移行を開始する前に次の COP ファイルを 12.0(1) システムにインストールする必要があります。インストールしない場合、Smart Licensing に関連するコンフィギュレーション ファイルは移行されません。

```
ciscocm-slm-migration.k3.cop.sgn
```

この要件は、Cisco Unified Communications Manager (ビルド 12.0.1.10000-10) のリリース 12.0(1) 以降の Prime Collaboration Deployment の移行にのみ適用されます。Cisco Unified Communications Manager 12.0(1)SU1 などの上位リリースから移行する場合、COP ファイルをインストールする必要はありません。



警告 Prime Collaboration Deployment 12.0(1a) を使用して Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence 12.0(1) に対してスケジュールされた MCS から仮想マシンへのネットワーク移行により、Cisco Unified Communications Manager のオープン欠陥に起因する IM and Presence のインストール問題が発生します。

TAC のサポートを得て IMP をインストールする前に、次の回避策を実行します。

1. Cisco Unified Communications Manager の processnode.xml ファイル内で、古い IM and Presence パブリッシャの IP アドレス エントリを新しい IP アドレスに置き換えます。
2. 新しい IM and Presence パブリッシャ エントリを Cisco Unified Communications Manager の [システム (System)] > [サーバリスト (Server list)] に追加します。
3. Cisco Prime Collaboration Deployment からの IM and Presence パブリッシャのインストールを再試行します。

表 1: Cisco Unified Communications Manager に対してサポートされているタスク (セッション管理エディションを含む)

タスク	リリース
クラスタ検出	6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)、8.0(1)、8.0(2)、8.0(3)、8.5(1)、8.6(1)、8.6(2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	<p>送信元 (From)</p> <p>6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)、8.0(1)、8.0(2)、8.0(3)、8.5(1)、8.6(1)、8.6(2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x</p> <p>目的</p> <p>10.x、11.x、12.x</p>

タスク	リリース
クラスタのアップグレード (アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール)	送信元 (From) 10.5(x)、11.x、12.x 目的 10.5(x)、11.x、12.x
再起動	8.6(1)、8.6(2)、9.0(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	8.6(1)、8.6(2)、9.0(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け (クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更)	10.x、11.x、12.x



(注) 注：(FIPS モードで構成された) 6.x または 8.x バージョンでタスクを実行する際、暗号バージョンで変更があるので、同時にタスク (クラスタ検出、移行クラスタ、アップグレードクラスタ、再起動、スイッチバージョン) を実行することはできません。同時に複数のタスクを実行しようとすると、失敗します。

表 2: Cisco Unified Presence に対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	8.5(x)、8.6(x)
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	送信元 (From) 8.5(4)、8.6(3)、8.6(4)、8.6(5) 送信先 (To) 10.x、11.x、12.x
再起動	8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
バージョン切り替え	8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	N/A
再アドレス付け (クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更)	N/A

表 3: *IM and Presence* サービスに対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	送信元 (From) 9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x 目的 10.x、11.x、12.x (注) Prime Collaboration Deployment Migration 11x/12.0+ から 11x+/12.0 は、「11x+/12.0」が、同じメジャー、同じマイナー、同じ MR、同じ SU/ES で、同一のバージョンの場合は、サポートされません。
クラスタのアップグレード (アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール)	送信元 (From) 10.5(x)、11.x、12.x 目的 10.5(x)、11.x、12.x
再起動	9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	9.0(1)、9.1(1)、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け (クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更)	未サポート

表 4: *Cisco Unified Contact Center Express* に対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	8.5(1)、9.0、9.0(2)、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行 (アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート)	未サポート

タスク	リリース
クラスタのアップグレード（アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール）	送信元（From） 10.5(x)、11.x、および 12.x 送信先（To） 10.5(x)、11.x および 12.x、
再起動	9.0(2)、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	9.0(2)、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け（クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更）	10.x、11.x、12.x

表 5: Cisco Unity Connection に対してサポートされているタスク

タスク	リリース
クラスタ検出	8.6.1、8.6.2、9.x、10.x、11.x、12.x
クラスタの移行（アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート）	未サポート
クラスタのアップグレード（アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール）	10.5(x)、11.x、12.x 目的 10.5(x)、11.x および 12.x
再起動	8.6(1)、8.6(2)、9.x、10.x、11.x、12.x
バージョン切り替え	8.6(1)、8.6(2)、9.x、10.x、11.x、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	10.x、11.x、12.x
再アドレス付け（クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更）	10.x、11.x、12.x

表 6: Cisco Emergency Responder でサポートされるタスク

クラスタ検出	11.5(x)、12.x
--------	--------------

クラスタの移行（アプリケーションのインストールと古いシステムからのデータのインポート）	未サポート
クラスタのアップグレード（アプリケーションバージョンのアップグレードまたは COP ファイルのインストール）	11.5(x)、12.x 目的 11.5(x)、12.x
再起動	11.5(x)、12.x
バージョン切り替え	11.5(x)、12.x
新しいクラスタのフレッシュインストールまたは既存のクラスタの編集/拡張	サポート対象外
再アドレス付け（クラスタ内の1つ以上のノードのホスト名または IP アドレスの変更）	11.5(x)、12.x

関連トピック

[アップグレードタスクの作成](#)（36 ページ）

[バージョン切り替えタスクの作成](#)（42 ページ）

輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス

次の表に、輸出規制対象バージョンと輸出規制対象外バージョンがあるアプリケーションのサポートされているアップグレードパスを示します。使用しているアプリケーションのバージョンは、ライセンス SKU を調べれば特定できます。輸出規制対象外バージョンは XU で示され、輸出規制対象バージョンは K9 で示されます。

表 7: 輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのサポートされているアップグレードパス

遷移元	目的	サポートされるタスクタイプ
輸出規制対象 (K9)	輸出規制対象 (K9)	アップグレードパスでサポート 移行パスでサポート
輸出規制対象 (K9)	輸出規制対象外 (XU)	アップグレードパスではサポートされない 移行パスでサポート

遷移元	目的	サポートされるタスクタイプ
輸出規制対象外 (XU)	輸出規制対象 (K9)	アップグレードパスではサポートされない 移行パスではサポートされない
輸出規制対象外 (XU)	輸出規制対象外 (XU)	アップグレードパスでサポート 移行パスでサポート

関連トピック

[アップグレードタスクの作成](#) (36 ページ)

[バージョン切り替えタスクの作成](#) (42 ページ)

サポートされる ESXi サーババージョン

次の表に、Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシン (VM) 用としてサポートされている ESXi サーバのバージョンを示します。この VM は、Cisco Unified Communications Manager またはその他のアプリケーション用の VM を実行している仮想化ホストと VMware API を通じて統合します。仮想化ホスト上で動作する Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシン用の VMware vSphere ESXi サーバの互換性のあるバージョンのリストを表示するには、http://docwiki.cisco.com/wiki/Unified_Communications_in_a_Virtualized_Environment を参照してください。

Cisco Unified Communications Manager またはその他のアプリケーションの VM が存在するホスト上の VMware vSphere ESXi	VMware API に関する Cisco Prime Collaboration Deployment バージョンの互換性
5.1 以前	なし
5.5	なし
6.x	<ul style="list-style-type: none"> なし：リリース 11.5(1) の場合 あり：リリース 11.5(1) SU1 以降の場合

クラスタ インベントリ

タスクでクラスタを使用する前に、Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリにそのクラスタを追加する必要があります。既存のクラスタをインベントリに追加するにはクラスタ検出機能を使用します。古いクラスタを新しい仮想マシンに移行することで新規クラスタを作成するには、[移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)] をクリックしま

す。新規クラスタをインストールするには、[新規 UC クラスタの定義 (Define New UC Cluster)] をクリックします。

クラスタの検出

クラスタの検出機能により、Cisco Prime Collaboration Deployment はすでに Unified Communications アプリケーションを実行しているサーバと通信し、そのクラスタ情報を Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加します。

クラスタの検出操作を実行すると、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバはクラスタのパブリッシャと通信し、クラスタ情報を取得します。その後、各サーバと個別に通信し、(設定情報を取得するため) サーバに `ciscocm.ucmap_platformconfig.cop` ファイルをインストールし、そのサーバのホスト名、IP、製品タイプ、およびアクティブバージョンおよび非アクティブバージョンに関する情報を収集します。

サポートされているアプリケーションの詳細については、関連項目の「「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」」を参照してください。



- (注) クラスタに Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence サービス (Cisco Unified Communications および IM and Presence Service サーバ) が含まれている場合、[クラスタ検出 (Cluster Discovery)] は、Cisco Unified Communications Manager クラスタの一部として、Cisco Unified Presence または IM and Presence サービスを検出します。

IM and Presence サービス ノードをメンテナンス リリース (MR) またはエンジニアリング スペシャル (ES) リリースにアップグレードし、Cisco Unified Communications Manager ノードをアップグレードしない場合は、次のルールが適用されます。

- アップグレードに Unified CM OS Admin インターフェイスを使用する場合は、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャ ノードをアップグレードしてから、IM and Presence サービス ノードを MR または ES リリースにアップグレードする必要があります。
- Cisco Prime Collaboration Deployment 移行タスクを使用する場合は、IM and Presence サービス ノードに加えて、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャ ノードを選択します。
- Cisco Prime Collaboration Deployment アップグレードタスクを使用する場合は、IM and Presence サービスの新しいバージョンの最初の 3 桁が Cisco Unified Communications Manager の現在インストールされているバージョンの最初の 3 桁と一致している限り、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャ ノードを選択する必要はありません。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
[クラスタ (Clusters)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 2 既存のクラスタを検出するには、[クラスタの検出 (Discover Cluster)] をクリックします。
[クラスタの検出 (Discover Cluster)] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 次のフィールドに詳細情報を入力します。

- このクラスタのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Cluster)
- クラスタ パブリッシャのホスト名または IP アドレス (Hostname/IP Address of Cluster Publisher)

(注) Unified Communications Manager および IM and Presence サービスの両方のノードが含まれているクラスタの場合、Cisco Unified Communications Manager パブリッシャのホスト名または IP アドレスを入力します。

(注) パブリッシャが NAT の後方にある場合、パブリッシャのプライベート IP アドレスを指定してもノードに到達できません。ノードの検出を正常に実行するには、適切な NAT/パブリック IP アドレスを指定する必要があります。

- OS 管理者ユーザ名
- OS 管理パスワード

(注) クラスタ パスワードが 16 文字未満であることを確認します。

- NAT の有効化 (Enable NAT)

ステップ 4 (任意) [NAT の有効化 (Enable NAT)] チェックボックスをオンにし、[次へ (Next)] をクリックします。

重要 検出中、ciscocm.ucmap_platformconfig.cop ファイルがクラスタ内のすべてのノードのアクティブなパーティションに自動的にインストールされます。この COP ファイルはクラスタ検出プロセスに使用され、Cisco Unified Communications Manager には影響を及ぼしません。

(注) クラスタが NAT の後方にある場合、アプリケーションはプライベートアドレスを使用して各ノードとの通信を確立しようとしています。そのため、ノードに到達できません。ポップアップ ウィンドウに到達不能なノードが表示されます。

Cisco Prime Collaboration Deployment は、パブリッシャサーバのインベントリからクラスタ ノードのリストを生成します。リスト生成処理が完了するまでには数分かかる場合があります。リストの生成後に、クラスタ検出プロセスが完了したことを示す確認メッセージが表示されます。

ステップ 5 [編集 (Edit)] をクリックして NAT IP アドレスを追加し、[OK] をクリックします。
NAT IP アドレスがホスト名として設定されます。

ステップ 6 到達不可能なノードの検出を再開するため、[検出再開 (Resume Discovery)] をクリックします。

Cisco Prime Collaboration Deployment は、プライベート IP アドレスの代わりに NAT IP アドレスを使用してクラスタの検出を試行し、バージョンなどのクラスタの詳細情報を取得します。検出が正常に完了すると、クラスタの詳細情報がウィンドウに表示されます。

ステップ 7 [Next] をクリックします。

ステップ 8 (任意) 各クラスタ ノードに機能を割り当てるには、[機能の割り当て (Assign Functions)] をクリックします。

(注) 機能の割り当ては、アクティブにされる予定のサービスには影響しません。ただしこの情報は、タスクのデフォルトシーケンスを決定するときに使用できます。

[機能の割り当て (Assign Functions)] ダイアログ ボックスが表示されます。

ステップ 9 [終了 (Finish)] をクリックします。

[クラスタ (Clusters)] ウィンドウに、クラスタのクラスタ名、製品とバージョン、クラスタタイプ (Discovered)、および検出ステータスが表示されます。

(注) クラスタを検出するまでに数分かかる場合があります。検出が完了すると、クラスタ内の各ノードの情報が [クラスタ インベントリ (Cluster Inventory)] ウィンドウに表示されます。検出を完了前にキャンセルすると、データが失われ、検出手順を繰り返す必要があります。

(注) [検出ステータス (Discovery Status)] フィールドに表示される各種ステータスを次に示します。

- [接続中 (Contacting)] : Cisco Prime Collaboration Deployment がクラスタとの通信確立中であることを示します。
- [検出中 (Discovering)] : クラスタ検出が進行中であることを示します。
- [成功 (Successful)] : クラスタ検出が正常に完了したことを示します。
- [ノードは到達不可能です (Node Unreachable)] : クラスタ ノードにアクセスできないことを示します。
- [タイムアウト (Timeout)] : クラスタ検出期間として設定された時間が経過しましたが、クラスタが検出されなかったことを示します。
- [内部エラー (Internal Error)] : 誤った NAT IP アドレスが原因でクラスタ検出が失敗したことを示します。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(5 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(10 ページ\)](#)

クラスタの変更および表示

クラスタにノードとして追加した仮想マシンを表示または変更するには、該当する1つ以上の仮想マシンを選択します。



- (注) インストールする必要があるクラスタ ノードは編集可能として表示され、[編集 (Edit)] リンクと [削除 (Delete)] リンクが表示されます。インストールされているクラスタ ノードはグレー表示され、編集または削除できません。



- (注) インストールされているクラスタに新しいノードを追加する場合、[NIC 設定 (Configure NIC Settings)] ページのすべてのフィールドがグレー表示になり、編集できません。他のページのフィールドには、インストール済みのノードの値がデフォルトで入力されます。必要に応じて、新しく追加されたノードの値を変更できます。

手順

- ステップ 1 「クラスタの検出」の手順に従ってクラスタを検出します。[クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ 2 検出されたクラスタまたは新規にインストールされたクラスタの1つのチェックボックスをオンにし、[編集 (Edit)] リンクをクリックします。
- ステップ 3 [リンクの編集 (Edit Link)] ウィンドウで、フィールドの詳細を確認し、必要に応じて詳細を変更します。
- ステップ 4 [OK] をクリックします。

ESXi ホスト サーバの追加



- 重要** ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment に追加する場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをネットワーク ファイル システム (NFS) マウントとしてそのホストにマウントする必要があります。将来的に Cisco Prime Collaboration Deployment マシンを削除する場合、まず ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment から削除して、ホスト上で NFS マウントが古くならないようにします。

ESXi ホストサーバと通信するため、Cisco Prime Collaboration Deployment は、ESXi ソフトウェアへのルートアクセスまたはホスト (構成、ストレージパーティション構成) および仮想マシン (通信、CD メディアの構成、フロッピーメディアの構成、デバイス接続、電源オフ、および電源オン) の権限が有効になっている非ルート ユーザのいずれかを要求します。管理者は、フレッシュインストールまたは移行に向けた、通信、CD メディアの構成、フロッピーメディアの構成、デバイス接続、電源オフ、および電源オンの権限などの Cisco Prime Collaboration Deployment タスクに対して特別な権限のあるルート ユーザを作成します。非 root ユーザ パスワードの長さは 16 文字未満にする必要があります。

ユーザパスワードの詳細については、[インストールに関する FAQ 情報](#) を参照してください。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをシャットダウンする場合、**utils system shutdown** CLI コマンドを使用することをお勧めします。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment VM のホストと、アプリケーション VM のホストが、必要な仮想化ソフトウェアライセンスを使用していることを確認します。[仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ](#)を参照してください。



(注) ESXi パスワードが 32 文字未満であること、クラスタ パスワード（インストール/検出済み/移行）が 16 文字未満であり、許可されている特殊文字について記述した前のセクションに準拠していることを確認します。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メニューから **[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** を選択します。

ステップ 2 [ESXi ホストの追加 (Add ESXi Host)] をクリックします。

ステップ 3 [ホストサーバの追加 (Add Host Server)] ダイアログボックスが表示されます。次の情報を入力します。

- a) ホスト名/IP アドレス (Hostname/IP Address)
- b) root サインインまたは十分な権限を与えられた非 root サインイン
- c) ルートパスワードまたは非ルート パスワード

ステップ 4 [OK] をクリックして ESXi ホストを追加します。

移行クラスタの作成

始める前に

移行タスクを作成するには、次の手順を実行します。

1. 移行する既存のクラスタを検出します。[クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) の「クラスタの検出」の手順を参照してください。
2. 移行クラスタを定義します。



- (注) 移行クラスタを定義したら、[移行タスク \(21 ページ\)](#) の「移行タスク」を参照し、移行を実行する時期とその方法を定義します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、**[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Cluster)]** を選択します。
- ステップ 2** **[移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)]** をクリックします。
[移行宛先クラスタの定義 (Define Migration Destination Cluster)] ウィザードが表示されます。
- ステップ 3** **[クラスタの指定 (Specify Clusters)]** セクションでクラスタの名前を指定し、ドロップダウンリストから送信元 UC クラスタを選択します。**[宛先クラスタ名 (Destination Cluster Name)]** フィールドに名前を入力し、**[宛先ネットワーク設定 (Destination Network Settings)]** の次のいずれかのオプションを選択します。
- デフォルト ネットワーク オプションを保持するには、**[すべての宛先ノードに対して送信元ノードのネットワーク設定を使用 (Use the source node network settings for all destination nodes)]** オプションを選択します。
 - デフォルトのネットワーク設定を変更するか、新しいネットワーク オプションを入力するには、**[1 つまたは複数の宛先ノードにの新規ネットワーク設定を入力 (Enter new network settings for one or more destination nodes)]** オプションを選択します。
- (注) **[すべての宛先ノードに対して送信元ノードのネットワーク設定を使用 (Use the source node network settings for all destination nodes)]** オプションを選択した場合、送信元ノードの **[NAT IP]** 列と **[宛先 NAT IP (Dest NAT IP)]** 列には、同じ IP アドレスが表示されます。**[1 つまたは複数の宛先ノードに対する新規ネットワーク設定を入力 (Enter new network settings for one or more destination nodes)]** オプションを選択すると、**[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)]** ウィンドウには送信元ホスト名だけが表示され、宛先ホスト名は表示されません。
- ステップ 4** **[Next]** をクリックします。
[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)] ウィンドウが表示されません。
- ステップ 5** **[宛先クラスタ ノードの割り当て (Assign Destination Cluster Nodes)]** ボタンをクリックして、各送信元ノードに対応する宛先仮想マシンを選択します。
- (注) DHCP が送信元ノードで使用されている場合、宛先ノードも DHCP を使用するように設定され、このウィザードではネットワーク設定を変更するオプションが表示されません。
- [宛先クラスタの設定 (Configure Destination Cluster)]** ウィンドウが表示されます。
- ステップ 6** 仮想マシンを選択し、**[次のノード (Next Node)]** をクリックして、クラスタ内の次のノードに進み、宛先仮想マシンとして別の仮想マシンを選択し、**[完了 (Done)]** をクリックします。

(注) クラスタ内に複数のノードがある場合、送信元クラスタ内の各ノードに対してこれらの手順 (VM の割り当ておよび必要に応じて新規 IP/ホスト名の入力) を繰り返します。

ステップ 7 [Next] をクリックします。

[NTP/SMTP の設定 (Configure NTP/SMTP Settings)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 8 移行タスクの実行時に移行ノードに適用されるネットワーク タイム プロトコル (NTP) サーバの設定を入力し、オプションで SMTP サーバの設定を入力します。

重要 プロキシ TFTP 設定では、ネットワーク移行が「オフクラスタ」で実行される場合、プロキシ TFTP 内のそのオフクラスタの新規ホスト名と IP アドレスを手動で設定する必要があります。オフクラスタとは、特定の Unified Communications Manager クラスタの一部ではないプロキシによって TFTP 機能が実行されている状態を指します。移行中は、その TFTP サーバ (クラスタの一部ではない) は修正されません。そのサーバのホスト名または IP アドレスを変更する場合は、その変更操作を Cisco Prime Collaboration Deployment で実行するのではなく、別のプロセスとして実行する必要があります。

ステップ 9 [Next] をクリックします。

[DNS 設定の定義 (Define DNS Settings)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 10 ノードの DNS 設定を変更するには、テーブルから 1 つ以上のノードを選択し、[DNS 設定の割り当て (Assign DNS Settings)] をクリックします。プライマリおよびセカンダリ DNS を入力し、変更を適用するには、[OK] をクリックして変更を適用します。

重要 移行時にドメイン名は変更できません。

ステップ 11 [終了 (Finish)] をクリックします。

変更が保存され、クラスタテーブルに行が追加されます。これにより、作成した新規移行クラスタが反映されます。

フレッシュインストールのために新規クラスタを追加

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。

ステップ 2 [Define New UC Cluster (新規 UC クラスタの定義)] をクリックします。
[クラスタの定義 (Define Cluster)] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 [クラスタ名の指定 (Specify Cluster Name)] セクションでクラスタ名を入力し、[次へ (Next)] をクリックします。
[仮想マシンの追加 (Add Virtual Machines)] ウィンドウが表示されます。

- ステップ 4** クラスタにノードを追加するには、[ノードの追加 (Add Node)] をクリックします。
[ノードの追加 (Add Node)] ダイアログ ボックスが表示され、使用可能な VM が名前とホストに基づいてソートされたリストが表示されます。
- ステップ 5** [ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウで、追加したノードのネットワーク設定を入力し、ノードの機能を選択し、ノードの VM を選択します。追加する VM を選択し、VM テーブルの下のセクションで以下の情報を入力します。
- a) [ネットワーク (Network)] セクションで、[静的 IP アドレス (Static IP Address)] または [予約がある DHCP を使用 (Use DHCP with reservations)] を選択します。[静的 IP アドレス (Static IP Address)] オプションを選択した場合は、ホスト名、IP アドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、および NAT IP を入力します。[予約がある DHCP を使用 (Use DHCP with reservations)] オプションを選択した場合は、ホスト名のほかに、(その VM の MAC アドレスに関連付けられている) DHCP サーバ上で予約のある IP アドレスを入力する必要があります。
- Cisco Unified Contact Center Express サーバを追加する場合は、ネットワーク設定に DHCP を使用しないでください。
- (注) [NAT IP] はオプションのフィールドです。手順 4 で NAT の後方にあるノードを選択した場合は、[NAT IP] フィールドに IP アドレスを入力します。それ以外の場合はこのフィールドを空白のままにしておきます。このフィールドに入力する値は [NAT IP] 列に表示されます。NAT IP アドレスがポートに関連付けられている場合、1 ~ 65535 の範囲内のポート値を入力します。
- b) [製品と機能 (Products and Functions)] リスト ボックスで、製品を選択します。
- c) [機能 (Functions)] セクションで、ご使用の VM に該当する機能のチェック ボックスをオンにします。
- (注)
- アプリケーションタイプごとに、定義されているクラスタ内の少なくとも 1 つのノードで [パブリッシャ (Publisher)] チェックボックスをオンにします。
 - (オプション) [パブリッシャ (Publisher)] フィールドの下の [注記 (Notes)] フィールドに、割り当てた機能に関する注を追加します。
- d) [OK] をクリックします。
- e) [仮想マシン (Virtual Machines)] セクションで、このノードの VM を選択します。
- (注)
- フレッシュ インストール クラスタの新しい VM を選択し、新しい VM をオフ状態にする必要があることを指定します。
 - 実行中の既存の Cisco Unified Communications Manager ノードにインストールしないでください。インストール先は、インストールするアプリケーションの適切な OVA を使用して作成するフレッシュ VM でなければなりません。
- ステップ 6** [OK] をクリックします。
追加した VM は [クラスタ名 (Cluster Name)] テーブルにリストされます
- ステップ 7** (任意) クラスタにさらにノードを追加するには、手順 4 ~ 6 を繰り返してください。

- ステップ 8** [Next] をクリックします。
[クラスタ全体の設定 (Configure Cluster Wide Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 9** このクラスタに関する OS 管理クレデンシヤル、アプリケーションクレデンシヤル、セキュリティパスワード、SMTP 設定、および証明書情報を入力して、[次へ (Next)] をクリックします。
- (注) FIPS モード、コモンクライテリア、または拡張セキュリティ モードを有効にする前に、セキュリティ パスワードが最小 14 文字以下であることを確認します。
- [DNS 設定 (Configure DNS Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 10** (オプション) ノードに DNS 設定を追加し、ノードを選択して、[DNS 設定の割り当て (Assign DNS Settings)] をクリックします。
Cisco Unified Contact Center Express アプリケーションは DNS を使用する必要があります。
[NTP 設定 (Configure NTP Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 11** 1 つ以上の NTP サーバの IP アドレスを入力します。
- (注)
- 少なくとも 2 つの NTP サーバの IP アドレスを定義することをお勧めします。
 - DNS を使用しない場合は、NTP サーバは IP アドレスである必要があります。
DNS を使用する場合は、NTP サーバは FQDN にできます。
- ステップ 12** [Next] をクリックします。
[NIC 設定 (Configure NIC Settings)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 13** (オプション) サーバを選択し、552 から 1500 までの間の MTU サイズを入力し、[選択したものに適用 (Apply to Selected)] をクリックします。
- ステップ 14** [Next] をクリックします。
[タイムゾーンの設定 (Configure Time Zones)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 15** ノードを選択し、[地域 (Region)] リスト ボックスから地域を選択し、[タイムゾーン (Time Zones)] リスト ボックスからタイムゾーンを選択して、[選択したものに適用 (Apply to Selected)] をクリックします。
- ステップ 16** [終了 (Finish)] をクリックします。
新規インストールクラスタが、[クラスタ (Clusters)] 画面にクラスタタイプ [新規インストール (New Install)] で表示されます。クラスタは定義されていますが、まだ作成されていません。クラスタをインストールするには、インストール タスクを作成します。インストール タスクは、定義されたインストール クラスタを使用し、クラスタを作成します。

タスク管理

クラスタおよび ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Development インベントリに追加したら、クラスタを管理するタスクを作成できます。各タスクには次のような共通機能があります。

- 各タスクは単一クラスタに適用されます
- 各タスクのデフォルトのシーケンス（たとえば、どのサーバがいつ影響を受けるかなど）は、定義したサーバ機能に基づいて適用されます
- 各自のニーズに対応するように、各タスクのシーケンスをカスタマイズできます。
- 各タスクは即時開始または後で開始するようスケジュールできます
- タスクは、特定の開始時間なしに作成できます。この場合、[モニタリング (Monitoring)] ページから適宜タスクを手動で開始できます。

移行、インストール、およびアップグレードタスクでは、1つ以上の Cisco Option Packages (COP) または ISO ファイルを選択することが必要です。タスクを作成する前に、これらのファイルを Cisco.com からダウンロードし、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバにアップロードしておく必要があります。「adminsftp」アカウントおよび OS 管理パスワードを使用して、任意の SFTP クライアントでファイルをアップロードできます。移行ファイルおよび .iso インストールファイルを /fresh_install ディレクトリにアップロードし、インストールするアップグレード .iso ファイルまたは .cop ファイルを既存のサーバの /upgrade ディレクトリに配置します。



(注) 移行およびインストール .iso ファイルは起動可能である必要があります。



(注) PCD スケジューラは、21 のタスク アクションを同時に実行できます。

移行タスク

はじめる前に

クラスタ移行を実行するには、移行タスクを作成する前に宛先仮想マシンでインストールの準備ができていない必要があります。次の作業が完了していることを確認してください。

1. **VMware** : 新しいクラスタに対しハードウェアを導入し、ESXi をインストールします。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment VM のホストと、アプリケーション VM のホストが、必要な仮想化ソフトウェアライセンスを使用していることを確認します。[仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ](#)を参照してください。

2. **ISO ファイル** : ターゲット リリースの推奨 OVA イメージおよび ISO イメージをダウンロードし、SFTP を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの /fresh_install ディレクトリに ISO ファイルを送信します。

3. **VMware** : 宛先ノードの VM を作成するため、Cisco 推奨の OVA を導入します。手順 2 でダウンロードした Cisco OVA を使用して、ESXi ホスト上に適切な数のターゲット仮想マシンを作成します（既存のクラスタ内の各サーバに対して 1 つの新規仮想マシン）。新規 VM でネットワークを設定します。
4. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 仮想マシンを含む ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加します。Cisco Prime Collaboration Deployment への ESXi ホストの追加についての詳細は、[ESXi ホストサーバの追加 \(15 ページ\)](#) を参照してください。
5. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 既存のクラスタ（送信元クラスタ）がクラスタインベントリに表示されるように、クラスタ ディスカバリを実行したことを確認します。クラスタ検出の詳細については、[クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) を参照してください。
6. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 移行クラスタ（ナビゲーションの開閉をクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)]** を選択）を作成し、MCS ソースノードと対象の仮想マシン間のマッピングを定義します。



重要 移行クラスタの作成時に、すべての宛先ノードで同じホスト名または IP アドレスを保持するか、またはこれらのアドレスの一部が変更されるかを指定する必要があります。

- すべての宛先ノードオプションに対して送信元ノードの設定を使用する方法は、「単純な移行」と呼ばれます。詳細については、移行フローチャートを参照してください。
 - 1 つまたは複数の宛先ノードオプションに新規ネットワーク設定を入力する方法は、「ネットワーク移行」と呼ばれています。詳細については、移行フローチャートを参照してください。
7. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 電子メール通知の設定（オプション）
 - ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[アドミニストレーション (Administration)] > [E メール通知 (Email Notification)]** を選択します。
 - E メール通知が設定されている場合、Collaboration Deployment サーバは、移行タスク中にエラー状態が発生した場合に、エラーの状況を E メールで通知します。
 8. **Cisco Prime Collaboration Deployment GUI** : 移行タスクを作成します。
 9. IM and Presence のパブリッシャ ノードとサブスクライバ ノードの両方に `ciscocm.migrate_export_10_0_1.sh_v1.1.cop.sgn.cop` ファイルをインストールします。

特記事項

- セキュリティが有効になっているクラスタを移行する場合は、[CTL 更新](#) で特別な手順を参照してください。ネットワーク移行で移行を実行する場合（送信元ノードおよび宛先ノード間で 1 つ以上のホスト名または IP アドレスが変更される場合）、移行タスクを開

始する前に DNS サーバ内の宛先ノードの IP アドレスおよびホスト名を更新してください。

- 送信元と宛先で別の NAT アドレスを指定し、送信元が突然切断されないようにすることができます。単純な移行を実行しながらも、送信元と宛先で別のネットワーク アドレス トランスレーション (NAT) を指定する必要がある場合は、[ネットワーク移行]「」を選択し、送信元と宛先に同じ詳細 (すべてのホスト名と IP アドレス) を入力する必要があります。



- (注)
1. クラスタを移行する前に、最新の Upgrade Readiness COP ファイルをインストールすることを推奨しています。詳細に関しては、『Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence Service 向けのアップグレードおよび移行ガイド』を参照してください。これは、ソース クラスタが 9. X またはそれ以上に対して適用可能で、Unified Communications Manager および IM&P にのみ有効です。
 2. 共通パーティションのソース クラスタのサイズに応じて、Prime Collaboration Deployment に十分な空きスペースがあることを確認します。

移行タスクの作成

クラスタを新規仮想マシンに同時にアップグレードおよび移行するように移行タスクを作成または編集するには、次の手順に従ってください。

サポートされている規制対象のパスと規制対象外のパスに注意してください。関連項目の「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」と「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」を参照してください。

手順

- ステップ 1 ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[タスク (Task)] > [移行 (Migrate)] を選択します。
- ステップ 2 [移行タスクの追加 (Add Migration Task)] をクリックします。[移行タスクの追加 (Add Migration Task)] ウィザードが表示されます。
- ステップ 3 [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[この移行タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Migration Task)] に移行タスクの名前を入力します。
- ステップ 4 [Source UC Cluster (送信元 UC クラスタ)] ドロップダウン リストから、移行するノードが置かれたクラスタを選択します。
- ステップ 5 [Destination Cluster (宛先クラスタ)] ドロップダウン リストから、宛先クラスタまたは移行マップを選択します。移行マップは、選択した送信元クラスタに関連付けられます。[Next] をクリックします。

アップグレードパッチを移行と同時に適用する場合は、[はい (Yes)] ラジオ ボタンをクリックします。[いいえ (No)] ラジオ ボタンをクリックすると、移行タスクのみが続行されます。

ステップ 6 新しく作成されたタスクを、以前に実行された別のタスクの正常な完了に従属させるには、[タスク依存関係スケジューリング (Task Dependency Scheduling)] にリストされているタスクのチェックボックスにマークを付けます。

依存関係タスクとして、複数のタスクを選択できます。どのような依存関係も持たないようにするには、[依存関係なし (No Dependency)] チェックボックスにマークを付けます。

ステップ 7 [移行ファイルの選択 (Choose Migration Files)] セクションで [参照 (Browse)] をクリックして、宛先クラスタにインストールする ISO ファイルを選択します。[移行ファイルの選択 (Choose Migration Files)] ウィンドウが開きます。リストから ISO ファイルを選択し、[OK] をクリックします。

移行と同時にアップグレードパッチを適用した場合は、そのパッチ ファイルを Unified Communications Manager と IM and Presence サービス向けの ISO ファイルとともに参照します。

ISO ファイルと同じエンジニアリング スペシャル (ES) /サービスアップデート (SU) パージョンのパッチ ファイルを選択する必要があります。

重要 ISO ファイルは、Prime Collaboration Deployment がローカル SFTP として使用されている場合に、/fresh_install の下のローカル SFTP ディレクトリ内に置かれていれば、ここに表示されます。任意のリモートの SFTP が移行クラスタに関連付けられている場合、ファイルはリモートの SFTP 内に存在している必要があります。

Prime Collaboration Deployment を SFTP として選択する場合、移行ファイルは /fresh_install の下、アップグレードパッチ ファイルは /upgrade ディレクトリの下に配置できます。任意のリモート SFTP を選択し、移行とアップグレードの両方のパッチ ファイルをその同じ SFTP サーバ内に置くことができます。

(注) 移行タスクを作成する際は、ISO ファイルの選択時に、クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていることを確認してください。クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていない場合、有効なファイルは、移行が可能な状態であっても、表示されません。すべての ISO ファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウン リストで [すべて (All)] を選択します。

(注) リモート SFTP サーバを追加するときは、新規インストール/移行とアップグレードのために、異なる SFTP ディレクトリを維持する必要があります。新規インストール、移行、およびアップグレード用に同じリモート SFTP サーバを追加することはできませんが、新規インストール、移行、およびアップグレードのためのディレクトリは、違うものにします。

ステップ 8 [Next (次へ)] をクリックします。

ステップ 9 [Start Time (開始時間)] セクションで、特定の開始時間のスケジュール、タスクの即時の開始、または将来のある時点でタスクを手動で開始するオプションから選択します。[Next] をクリックします。

(注) Cisco Prime Collaboration Deployment では、依存関係タスクは既存のタスクが正常に完了した後に自動的に開始するので、依存関係タスクの日時を選択できません。

ステップ 10 [Specify Migration Procedure (移行手順の指定)] セクションに、移行タスクのデフォルトのシーケンスが表示されます。必要に応じて、移行手順のシーケンス手順を変更できます（たとえば、デフォルトは各サブスクリバを個別にインストールすることです。1つの手順で複数のサブスクリバをインストールするように変更できます。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページアイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは [手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこの手順に移行するノードを追加します。使用可能なノードは、移行のために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。

重要 すべてのノードを割り当てるとは次の手順に進むことができません。

- [手順完了後タスクを一時停止 (Pause task after step completes)] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始する必要があります。

タスクのシーケンスの詳細については、この項の最初のタスク管理情報を参照してください。

ステップ 11 [Next] をクリックします。

ステップ 12 [レビュー (Review)] セクションで、選択した内容を確認できます。新しい移行タスクに注記を追加することもできます。

ステップ 13 必要な変更がない場合は、[終了 (Finish)] をクリックして新しい移行タスクを追加します。

ステップ 14 新規移行タスクは、[Migrate (移行)] 画面上のテーブルに表示されます。

重要 ネットワーク移行で移行を実行する場合、すべてのサーバがインストールされた後、ユーザが処理を実行できるようにするため、シーケンスに自動的に「強制一時停止 (Forced Pause)」手順が挿入されます。手動による処理が必要な場合の詳細については、「移行タスクの実行」を参照してください。「[強制一時停止 (Forced Pause)]」手順は、編集または移動ができず、ノードは割り当てられていません。CTL アップデートまたは証明書管理手順が必要な場合は、送信元ノードがシャットダウンする前にこれらの手順を実行する必要があるため、この手順は、送信元ノードのシャットダウン手順より前に挿入されます。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(5 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(10 ページ\)](#)

移行タスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [手動開始 (Manual Start)] を選択した場合、タスクはタスクリストにリストされますが開始されません。この場合、タスクに関連付けられている検証ボタンがあります。タスクを実行前に確認するには、[検証 (Validate)] をクリックします。タスクに問題がある場合 (ISO ファイルの欠落、オフ状態にない VM など)、検証により警告が出されるため、タスク開始前に問題を解決できます。

開始がスケジュールされているタスクの場合、タスクを開始するには [開始 (Start)] ボタンをクリックします。

移行タスクの実行中、移行タスクのタイプによっては、ユーザ操作が必要になる場合があります。たとえば、「ネットワーク移行を伴う移行」を実行している場合、シーケンスではすべてのサーバのインストール後に自動的に「強制一時停止」が挿入されます。これにより、すべての新規サーバがインストールされた後、送信元マシンがシャットダウンする前に移行タスクが停止します。

次に示す表と、適切な [移行手順 (Migration Procedure)] フローチャート (下の「移行手順フローチャート」の項を参照) を参照して、移行タスクの実行中にユーザの介入が必要かどうかを確認してください。



重要 移行クラスタが作成されたら、すべての宛先ノードが同じホスト名またはアドレスを保持するか、またはこれらのアドレスの一部が変更するかどうか指定する必要があります。

- すべての宛先ノードオプションに対して送信元ノード設定を使用することは、「移行手順フローチャート」の項で「単純な移行」と呼ばれています。
- 1つ以上の宛先ノードオプションの新規ネットワーク設定を入力することは、「移行手順フローチャート」の項で「ネットワーク移行」と呼ばれています。

Unified CM 送信元 クラスタ - 移行前 のリリース	単純な移行または ネットワーク移行	Unified CM 送信元 クラスタ - (セ キュアまたは非セ キュア)	移行中に実行されるユーザプロシ ージャ
6.1(5)、7.1(3)、 7.1(5)	単純な移行	セキュア	移行中に必要な手順はありません。
6.1(5)、7.1(3)、 7.1(5)	単純な移行	非セキュア	移行中に必要な手順はありません。
6.1(5)、7.1(3)、 7.1(5)	ネットワーク移行	セキュア	移行タスクが[強制一時停止 (Forced Pause)]手順に到達したら、[再開 (Resume)]ボタンをクリックしま す。
6.1(5)、7.1(3)、 7.1(5)	ネットワーク移行	非セキュア	移行タスクが[強制一時停止 (Forced Pause)]手順に到達したら、[再開 (Resume)]ボタンをクリックしま す。
8.x、9.x、および 10.x	単純な移行	セキュア	移行中に必要な手順はありません。
8.x、9.x、および 10.x	単純な移行	非セキュア	移行中に必要な手順はありません。
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	セキュア	移行タスクが「強制一時停止」手順 に到達すると、次の手順が実行され ます。 1. CTL 更新 2. 証明書の一括管理 3. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI のタスクを再開 します。
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	非セキュア	移行タスクが「強制一時停止」手順 に到達すると、次の手順が実行され ます。 1. 証明書の一括管理 2. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI のタスクを再開 します。

クラスタ内の Cisco Unified Communication Manager ノードの移行後タスク

「移行タスクがネットワーク移行で実行された場合、移行タスクが正常に実行された後でいくつかの追加手順を行う必要があります（単純な移行が実行された場合、移行後タスクは必要ありません）。」

移行タスクが正常に完了したら、次の表と該当する移行のユースケースフローチャートを参照して、ユーザタスクを実行する必要があるかどうかを判断してください。

Unified CM 送信元 クラスタ - 移行前 のリリース	単純な移行または ネットワーク移行	Unified CM 送信元 クラスタ（セキュア または非セキュア）	移行後に実行されるユーザプロシ ージャ
6.1(5)、7.1(3)、 7.1(5)	ネットワーク移行	セキュア	<ol style="list-style-type: none"> CTL 更新を実行します。 Unified Communications Manager でのサービスの再起動 TFTP Server IP アドレスの変更 電話機の登録の確認
	ネットワーク移行	非セキュア	<ol style="list-style-type: none"> TFTP Server IP アドレスの変更 電話機の登録の確認
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	セキュア	<ol style="list-style-type: none"> TFTP Server IP アドレスの変更 電話機の登録の確認
	ネットワーク移行	非セキュア	<ol style="list-style-type: none"> TFTP Server IP アドレスの変更 電話機の登録の確認



(注) シンプルまたはネットワーク上の移行タスク後は、デバイスのデフォルト設定は、ソースクラスタから同期先クラスタに引き継がれません。

宛先クラスタのバージョンにデバイスパック機能が含まれていない場合は、特定の機能用にインストールされたデバイスパックを再インストールする必要があります。

IM and Presence サービスの移行後タスク

移行されたクラスタに IM and Presence サービス ノードが含まれており、ネットワーク移行を実行している場合、リリース 10.x より前の IM and Presence サービス クラスタでは以下のインストール後タスクを実行する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	証明書と証明書信頼ストアを設定します。	<p>古いクラスタのコンポーネント信頼ストアに CA によって署名された証明書がある場合、コンポーネントの移行されたリリース 10.x クラスタに自己署名証明書があることに注意してください。</p> <p>また、認証局のルートおよび中間証明書は、それぞれの信頼ストアに保持されません。古い認証局で証明書に署名する必要があります。これは最初の方法に似ています。</p> <p>詳細については、『<i>Administration Guide for Cisco Unified Communications Manager Guide</i>』を参照してください。</p>
ステップ 2	クラスタ間ピアを設定します。	<p>古いクラスタにクラスタ間ピア関係がある場合、すべてのピア クラスタから設定を削除する必要があります。これが完了したら、新規クラスタのネットワーク詳細に基づいて適切な相互クラスタを追加します。</p> <p>たとえば、クラスタ A、クラスタ B およびクラスタ C はすべてクラスタ間ピアです。クラスタ A が移行したら、古いクラスタ A からすべての相互クラスタ設定を削除し、クラスタ B およびクラスタ C にも同様に実行します。この後、新規クラスタ A のネットワーク詳細とともに相互クラスタを追加します。移行によって古いデータは変更されるため、新しいクラスタ A から設定を実行する必要はありません。</p> <p>詳細については、『<i>Deployment Guide for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i>』を参照してください。</p>
ステップ 3	SIP フェデレーションを再発行します。	<p>古いクラスタが Microsoft OCS/Lync/AOL と SIP インタードメインでフロントエンドまたは OCS/Lync で SIP インタードメイン フェデレーションだった場合、企業はフェデレーティング ドメインの DNS-SRV を、新規ネットワーク詳細を</p>

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>反映するように再発行する必要があります。</p> <p>DNS-SRV ベースのルーティングの代わりに設定された SIP スタティック ルートが遠端にある場合は、新しいネットワーク アドレスを反映するように SIP スタティック ルートを変更する必要があります。同様に、新規クラスタに正常にルーティングするには、すべての中間ネットワーク要素（ASA またはトラフィックを外部フェデレーション エンティティからの古いクラスタにルーティングまたは検査するその他の同様のコンポーネントを含む）を再設定する必要があります。</p> <p>ドメイン間設定に対しては、 「<i>Interdomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i>（<i>Cisco Unified Communications Manager</i> 上の <i>IM and Presence</i> サービスに対するドメイン間フェデレーション）」を参照してください。</p> <p>ドメイン間フェデレーションについては、『<i>Partitioned Intradomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i>』を参照してください。</p>
ステップ 4	XMPP フェデレーションを再発行します。	<p>古いクラスタが任意の外部 XMPP サーバに対して XMPP ドメイン間フェデレーションのフロントエンドを実行している場合、新規ネットワーク詳細を反映するため、企業は、フェデレーティングドメインの DNS-SRV レコードを再発行する必要があります。</p> <p>詳細については、「<i>Interdomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager</i>」を参照してください。</p>
ステップ 5	Cisco Jabber と Cisco Unified Personal Communicator の接続を設定します。	<p>Jabber または Unified Personal Communicator は、古いクラスタからホスト名の情報をキャッシュします。設定</p>

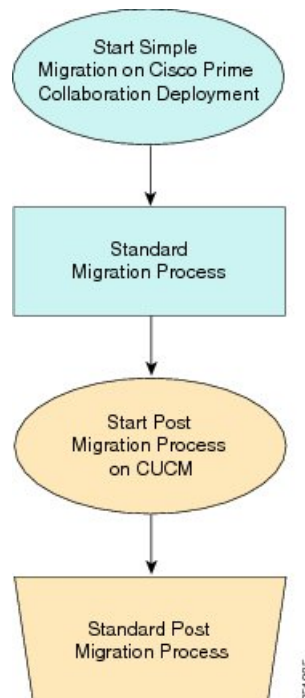
	コマンドまたはアクション	目的
		<p>をユーザのデスクトップにプッシュできない場合、またはそのユーザがノード名のいずれかを手動で入力しない場合、Jabber または Unified Personal Communicator には新規ホスト名情報がありません。</p> <p>古いクラスタから割り当て解除され、ログインできないユーザに対するフェールセーフなアプローチでは、ユーザは（移行前に通知された）新規クラスタ内のノードのいずれかのホスト名または IP アドレスを手動で入力します。このシナリオでは、ユーザのクライアントは、ログインのリダイレクトによって正しいホーム ノードを検出しています。</p>

移行手順のフローチャート

移行タスクを実行する際に、以下のタスク フローをガイドとして使用してください。

単純な移行

図 1: 単純な移行のためのフローチャート

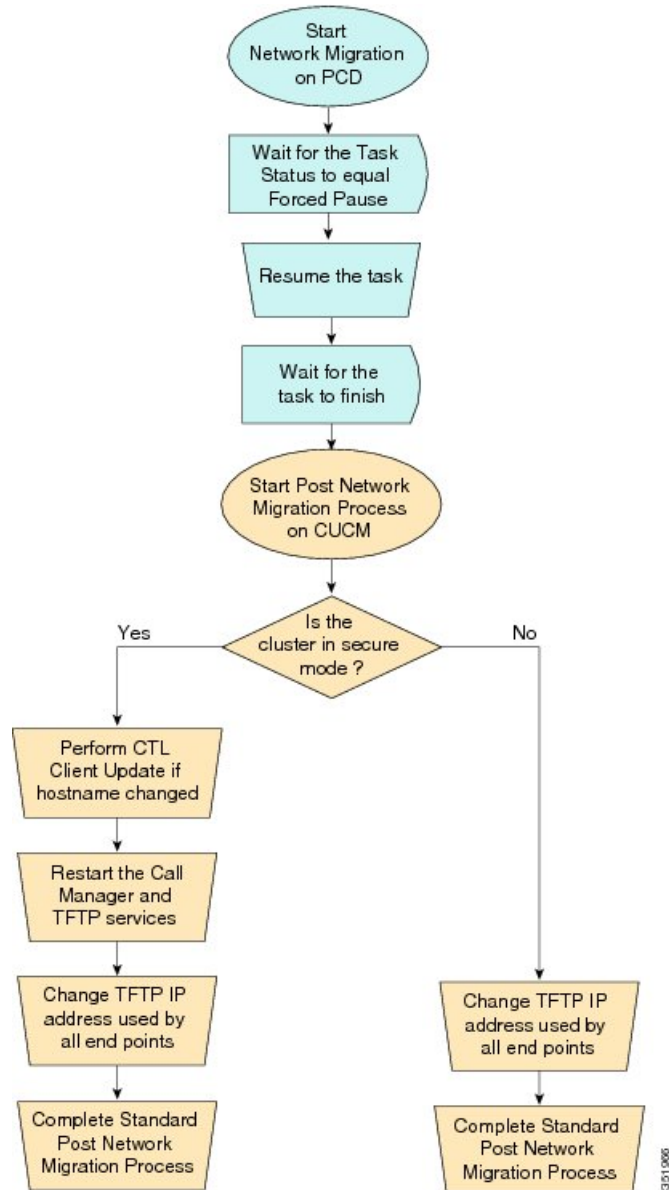




(注) Cisco Prime Collaboration Deployment は、7828H3 MCS 上で動作する Business Edition 5000 アプリケーションの移行をサポートしません。

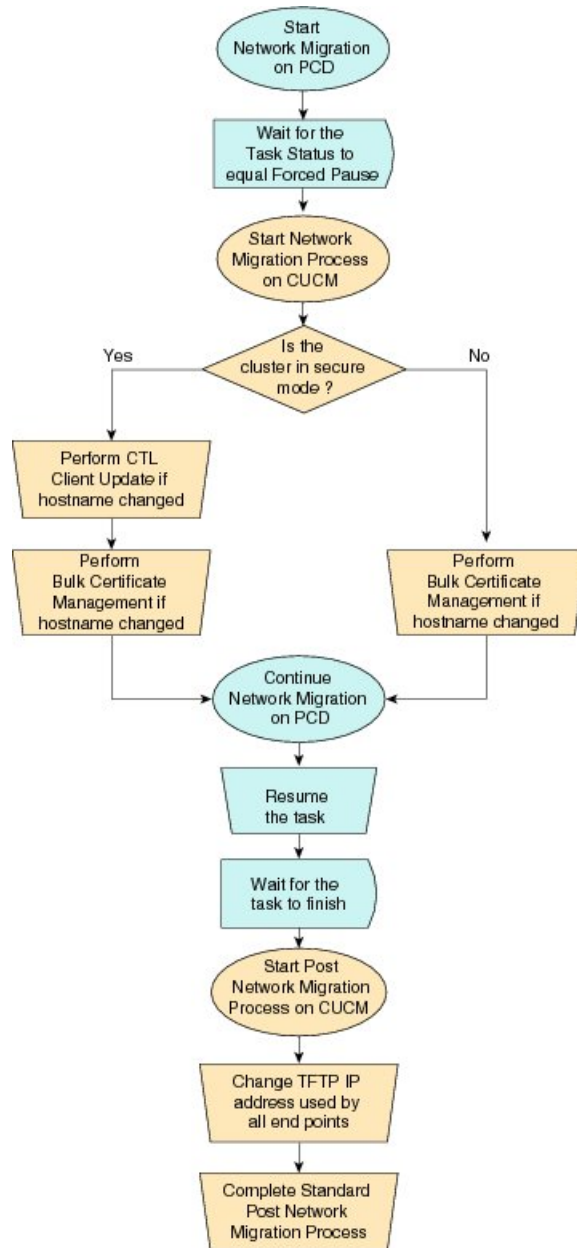
リリース 8.0.1 前の Unified CM Network 移行

図 2: リリース 8.0.1 前の Unified Network 移行のフローチャート



リリース 8.0.1 以降の Unified CM Network 移行

図 3: リリース 8.0.1 以降の Unified CM Network 移行のフローチャート

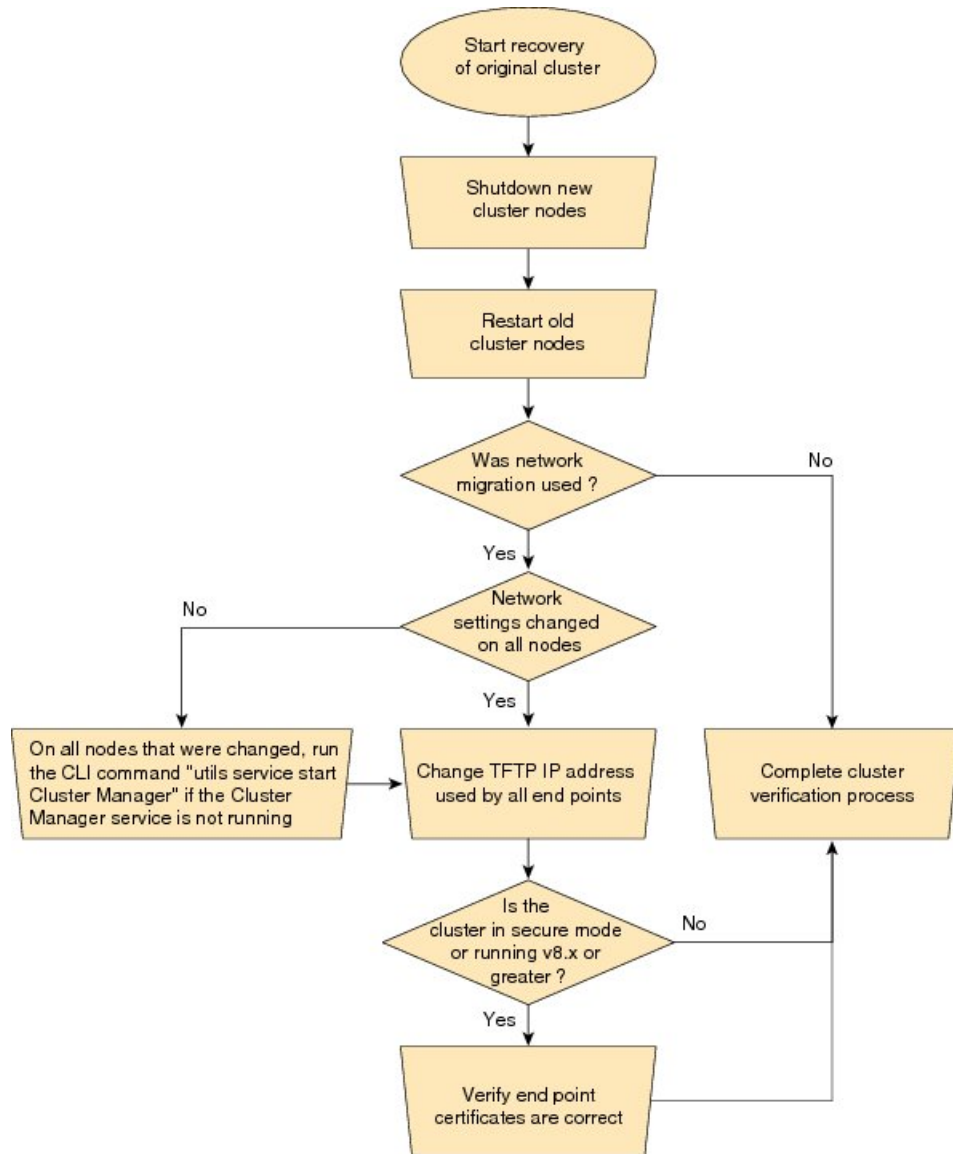


351967

送信元クラスタのリカバリ

クラスタの移行に失敗し、一部のノードが新規クラスタにインストールされた場合、以下の手順を使用してください。

図 4: 送信元クラスタのリカバリのフローチャート



DE 10281

すべての送信元ノード上の Cluster Manager Service のステータスの確認

以下の手順は、1つ以上のノードでネットワーク移行による変更があり、移行タスクが失敗した場合に使用されます。失敗後、いくつかの手順を実行して古いクラスタノードを再び実行することが必要になる場合があります。使用するすべての手順については、上記のフローチャートを参照してください。古いノードでクラスタマネージャを再起動するために CLI コマンドを実行する詳細は以下のとおりです。

すべての古いクラスタノードが起動し、稼働状態になった後で、ネットワークの変更（たとえば、ホスト名、IP アドレス、またはその両方）が加えられるすべてのサブスクリバノード上で以下の手順を手動で実行します。

送信元ノードでクラスタマネージャの再起動が必要になる可能性のある使用例は以下のとおりです。

使用例 1

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクリバ上でホスト名変更あり

ユーザは送信元サブスクリバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

使用例 2

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクリバ上で IP アドレス変更あり

ユーザは送信元サブスクリバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

使用例 3

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクリバ上でホスト名および IP アドレス変更あり

ユーザは送信元サブスクリバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

使用例 4

ホスト名はパブリッシャで変更なし、IP アドレスがパブリッシャで変更あり、サブスクリバではホスト名と IP の変更なし

ユーザは送信元パブリッシャで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

手順

ステップ 1 コマンドプロンプトで CLI コマンド **utils service list** を入力します。次の出力が表示されます。

```
Requesting service status, please wait... System SSH [STARTED] Cluster Manager [STOPPED]
```

ステップ 2 Cluster Manager Service ステータスが [停止 (STOPPED)] の場合、古いサブスクリバノード上でサービスを開始するために以下のコマンドを入力してください。

utils service start Cluster Manager

アップグレードタスク

Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して、次の種類のアップグレードタスクを実行します。

- 直接標準アップグレード：このアップグレードは、組み込みのオペレーティングシステムに対するアップグレードを必要としません。システムを稼働したまま、サーバにアップグレードソフトウェアをインストールできます。
- 直接更新アップグレード：このアップグレードは、新旧のソフトウェアリリース間に互換性がない場合に必要になります。たとえば、更新アップグレードは、組み込みオペレーティングシステムのメジャーバージョンがアップグレード前とアップグレード後で変化する場合に必要になります。

直接標準アップグレードと直接更新アップグレードのどちらを実行する必要があるかは、アプリケーションによって自動的に決定されます。

アップグレードタスクの作成

クラスタでソフトウェアバージョンのアップグレードを実行するには、アップグレードタスクを使用します。アップグレードタスクは、クラスタ内のすべてのサーバまたはサーバのサブセット上に .cop ファイルをインストールする場合にも使用できます。

サポートされているアプリケーション、リリース、およびバージョンを確認するには、関連項目の「「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」」と「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。



-
- (注) 選択された送信元バージョンと宛先バージョンに基づいて、Cisco Prime Collaboration Deployment は、直接標準アップグレードシーケンスまたは検証と、直接更新アップグレードシーケンスまたは検証のどちらかを使用します。
-



-
- (注) • Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して Cisco Unified Communications Manager をリリース 6.1(5)、7.x、8.x、9.x、または 10.x からリリース 10.5(2) 以降にアップグレードする場合は、VM インスタンスと ESXi 間の時刻同期を無効にする必要があります。時刻同期の問題を無効にするには、次の URL の手順に従います。

http://kb.vmware.com/selfservice/microsites/search.do?language=en_US&cmd=displayKC&externalId=1189

同じ NTP サーバを指すように ESXi サーバと Cisco Unified Communications Manager のパブリッシュノードを設定する方法もあります。

アップグレードタスクを作成および編集するには、[アップグレードタスクの追加 (Add Upgrade Task)] ウィザードを使用します。

1 つ以上のクラスタでスケジュールされた時間に自動的に実行されるように新規アップグレードタスクを作成または編集するには、以下の手順に従ってください。

始める前に

1. サポートされている規制対象のパスと規制対象外のパスに注意してください。関連項目の「「サポートされているアップグレードタスクと移行タスク」」と「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。
2. アップグレードするクラスタのクラスタ ディスカバリを実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにします。[クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) を参照してください。
3. アップグレードする ISO ファイルをダウンロードし、SFTP を使用してこのファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment の upgrade フォルダに送信します。.cop ファイルをインストールするためにアップグレードタスクを使用している場合、SFTP クライアントを使用して .cop ファイルを /upgrade フォルダにアップロードします。
4. クラスタ内のアプリケーションサーバをアップグレードするには、そのサーバ上で Platform Administrative Web Service を必ずアクティブにしてください。



- (注) クラスタをアップグレードする前に、最新の Upgrade Readiness COP ファイルをインストールすることを推奨しています。詳細に関しては、『Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence Service 向けのアップグレードおよび移行ガイド』を参照してください。これは、ソースクラスタが9.Xまたはそれ以上に対して適用可能で、Unified Communications Manager および IM&P にのみ有効です。

手順

- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メニューから、[タスク (Task)] > [アップグレード (Upgrade)] を選択します。
- ステップ 2** [Add Upgrade Task (アップグレードタスクの追加)] をクリックします。
- ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[このアップグレードタスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Upgrade Task)] にアップグレードタスクの名前を入力します。
- ステップ 4** アプリケーショングレードタイプを [ISO] または [COP] として選択します。
単一のアップグレードタスクで複数の cops ファイルをインストールできます。
- (注) ユーザがアップグレード用に複数の cop ファイルを選択した場合、タスクシーケンスは選択された COP ファイルに従ってロードされます。
- (注) 特定の製品に対して最大 32 COP ファイルを選択できます。
- ステップ 5** [Cluster (クラスタ)] ドロップダウンリストから、インストールするノードが置かれたクラスタを選択します。

- ステップ 6** 新しく作成されたタスクを、以前に実行された別のタスクの正常な完了に従属させるには、[タスク依存関係スケジューリング (Task Dependency Scheduling)] にリストされているタスクのチェックボックスにマークを付けます。
- 依存関係タスクとして、複数のタスクを選択できます。どのような依存関係も持たないようにするには、[依存関係なし (No Dependency)] チェックボックスにマークを付けます。
- アップグレード ISO タスクは、アップグレードタスクのみに依存関係を持たせることができます。
- アップグレード COP タスクは、インストールと移行タスクに依存関係を持たせることができます。
- ステップ 7** ノードのリストからアップグレードの一部となるノードを選択します。
- ステップ 8** [Next] をクリックします。
- (注) ノードが選択されていない場合、[次へ (Next)] ボタンはグレー表示になります。
- ステップ 9** 対応する [参照 (Browse)] ボタンをクリックしてファイルサーバからアップグレードファイルを選択します。
- (注) アップグレードファイルを選択するオプションは、クラスタ内で現在サポートされる選択した製品タイプおよびアプリケーションに対してのみ使用できます。
- ステップ 10** 有効なアップグレードファイルを選択します。
- (注) ファイルサーバで利用可能なすべてのアップグレードファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウンリストをクリックします。
- (注) アップグレードタスクを作成する際は、ISO/COP ファイルの選択時に、クラスタノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO/COP ファイルが共有されていることを確認してください。クラスタノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO/COP ファイルが共有されていない場合、有効なファイルは、アップグレードが可能な状態であっても、表示されません。すべての ISO/COP ファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウンリストで [すべて (All)] を選択します。
- (注) リモート SFTP サーバを追加するときは、新規インストール/移行とアップグレードのために、異なる SFTP ディレクトリを維持する必要があります。新規インストール、移行、およびアップグレード用に同じリモート SFTP サーバを追加することはできませんが、新規インストール、移行、およびアップグレードのためのディレクトリは、違うものにします。
- ステップ 11** [Choose File (ファイルを選択)] をクリックします。
- ステップ 12** [Next] をクリックします。
- (注) 有効なアップグレードファイルが選択されていない場合、[次へ (Next)] ボタンがグレー表示になります。

ステップ 13 アップグレードタスクを開始する日時を選択します。アップグレードをスケジュールする以下のオプションがあります。

タスクを依存関係タスクとして作成すると、[開始時刻の設定 (Set Start Time)] セクションは無効になります。

(注) Cisco Prime Collaboration Deployment では、依存関係タスクは既存のタスクが正常に完了した後に自動的に開始するので、依存関係タスクの日時を選択できません。

- [特定の時間に対するスケジュール (Schedule for a specific time)] を選択してアップグレードタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づきます。

(注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [手動によるタスクの開始 (Start task manually)] を選択します。

(注) タスクを手動で開始することを選択した場合、タスクが作成されますが、[モニタリング (Monitoring)] ページで [タスクの開始 (Start task)] ボタンをクリックするか、タスク ページで [タスクの開始 (Start task)] リンクをクリックするまで開始しません。

- [終了 (Finish)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)] を選択します。
- システムが新しいバージョンに自動的に切り替えるようにするには、[正常なアップグレード後に新規バージョンに自動的に切り替えるアップグレード オプション (Upgrade Option to Automatically Switch to New Version after Successful Upgrade)] オプションをクリックします。これ以外の場合は、サーバはアップグレードされますが、ソフトウェアの現在のバージョンのままになります。この場合は、バージョン切り替えタスクをスケジュールして、アップグレードされたバージョンのソフトウェアに切り替えることができます。

ステップ 14 [Next] をクリックします。

ステップ 15 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページアイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。パブリッシャ ノードを含む手順を削除することはできません。

オプション	説明
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)]アイコンは[手順の編集 (Edit Step)]ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこの手順にアップグレードするノードを追加します。使用可能なノードは、アップグレードのために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。
重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。
- [Pause task after step completes (手順完了後タスクを一時停止)]オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始します。

ステップ 16 [OK] をクリックします。

ステップ 17 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [次へ (Next)] ボタンは有効なままになっているため、このボタンをクリックして設定エラーを表示できます。

ステップ 18 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを参照してください。必要に応じて、タスクに関するメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 19 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(5 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(10 ページ\)](#)

直接更新アップグレード

更新アップグレードを実行すれば、更新前後のオペレーティングシステムが異なる場合に、既存の製品のバージョンをより新しいバージョンにアップグレードできます。このアップグレードに対応している製品は、Cisco Unified Communications Manager、IM and Presence サービス、Cisco Unity Connection、Cisco Unified Contact Center Express および Cisco Emergency Responder です。

以前のリリースでは、直接更新アップグレード後に、Cisco Unified Communications Manager が新しいバージョンにアップグレードされても、古いバージョンにスイッチバックされていました。

た。新しいバージョンは非アクティブバージョンとなるため、アクティブバージョンにするために、バージョン切り替えが必要でした。バージョンのアップグレードと切り替えが別々のステップだったため、スイッチバックが発生していました。つまり、直接更新アップグレード後は、新しいバージョンを作成するために、バージョンを2回切り替えなければなりませんでした。

2回のバージョン切り替えを防ぐために、本リリースでは、Cisco Prime Collaboration Deployment に、更新アップグレード手順の一部としてバージョン切り替え手順が含まれています。アップグレードタスクの設定時に [アップグレードタスク (Upgrade Task)] ウィンドウで [正常なアップグレード後に新規バージョンに自動的に切り替え (Automatically switch to new version after successful upgrade)] チェックボックスをオンにします。そうすれば、製品 (Cisco Unified Communications Manager と IM and Presence サービスのどちらか) のバージョン切り替えがアップグレード手順の一部として組み込まれます。ただし、アップグレードが Cisco Unified Communications Manager または IM and Presence サービスのクラスタを対象とする場合は、バージョン切り替え手順が別の手順として実行されます。

データベース レプリケーション

データベース レプリケーションは、更新アップグレードプロセスの手順の1つです。Cisco Prime Collaboration Deployment は、サービスとコマンドを実行し、選択された Cisco Unified Communications Manager ノードのデータベース レプリケーション ステータスを待機します。

詳細については、<http://www.cisco.com/c/en/us/support/unified-communications/unified-communications-manager-callmanager/tsd-products-support-series-home.html> の『Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence Service のアップグレードと移行ガイド』の「「Sequencing Rules and Time Requirements」」の章を参照してください。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment は、Cisco Unified Communications Manager と IM and Presence サービスが組み込まれたクラスタが選択された場合にデータベース レプリケーションをチェックします。データベース レプリケーションは、IM and Presence サービスのアップグレードまたは切り替えの前に Cisco Unified Communications Manager に対してのみ実行されます。

データベース レプリケーションが正常に終了したら、アップグレードシーケンスで次のタスクが開始されます。データベース レプリケーション後のタスクには、IM and Presence サービスサブスクリバノードのバージョンのアップグレードまたは切り替えが含まれます。

前のタスクからのシーケンスの再利用

[前のタスクからのシーケンスの再利用 (Reuse Sequence from Previous Task)] 機能は、現在作成中のタスクで以前に定義されたタスクシーケンスを使用します。この機能は、アップグレード、再起動、バージョン切り替え、移行、および再アドレス付けタスクで役立ちます。これを使用して、シーケンスのスクリプトを最初から作成せずに、以前に設定されたタスクシーケンスを再利用できます。

タスクの作成中にシーケンス ペインでタスク ウィザードが進行し、ユーザは順番を設定したり特性を一時停止できます。システム内に同様のタイプのタスクがある場合、このタスクからのシーケンスがデフォルト シーケンスとして提示されます。

この場合、[最後に設定した実行シーケンスを使用 (Use Last Configured Run Sequence)] とラベル付けされたチェックボックスがシーケンステーブルのすぐ上に表示されます。前のタスクのシーケンスを使用する場合はこのチェックボックスをオンにし、システムが生成したデフォルトのシーケンスを使用する場合はこのチェックボックスをオフのままにします。

同様のタイプのタスクとみなされるには、タスク内の選択されたクラスタ、タスクタイプ、およびノードが完全に一致する必要があります。同様のタイプの条件を満たすタスクが複数ある場合、直近に作成されたタスクが使用され、そのシーケンスがユーザのデフォルトとして提示されます。

アップグレードタスクの場合は、追加の要件があります。インストールのタイプは ISO または COP ベースである必要があります。COP および ISO インストールは別のシーケンスで実行できます。

バージョン切り替えタスク

バージョン切り替えタスクの作成

クラスタ内の 1 つ以上のノードをアップグレードバージョンまたは非アクティブバージョンに自動的に切り替えるには、バージョン切り替えタスクを使用します。

バージョン切り替えタスクを作成または編集するには [バージョン切り替えタスク (Switch Versions Task)] ウィザードを使用します。

アップグレードタスクに対してサポートされているアプリケーションとリリースを確認するには、関連項目の「「サポートされているアップグレードと移行」」および「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。

クラスタ内の 1 つ以上のノードを、スケジュールされた時間にアップグレードバージョンまたは非アクティブバージョンに自動的に切り替えるようにバージョン切り替えタスクを作成または編集するには、以下の手順に従ってください。



- (注) [Automatic Switch version (自動バージョン切り替え)] オプションは、IM and Presence または Cisco Unified Contact Center Express ノードを含むクラスタでは利用できません。Cisco Unity Connection および Cisco Unified Contact Center Express を含むクラスタの場合、アップグレードタスクを作成してから、新しいバージョンに切り替えるためのスイッチバージョンタスクを作成します。バージョン切り替えタスクは、アップグレードタスクが正常に実行された後に作成できます。

始める前に

1. バージョンを切り替えるクラスタに対してクラスタ検出を実行し、クラスタインベントリにクラスタが表示されるようにします。[クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) を参照してください。これまでに Cisco Prime Collaboration Deployment を使用してクラスタをアップグレードまたは移行したことがある場合、クラスタはすでにインベントリに含まれています。
2. クラスタ内の各アプリケーションに対して、そのサーバで Platform Administrative Web Service がアクティブであることを確認してください。

手順

-
- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メニューから、[タスク (Tasks)] > [スイッチバージョン (Switch Versions)] を選択します。
- ステップ 2** [Add Switch Versions Task (バージョン切り替えタスクの追加)] をクリックします。
- ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[この移行タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Migration Task)] に移行タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** [Clusters (クラスタ)] ドロップダウンリストから、バージョンを切り替えたいクラスタを選択します。
- ステップ 5** すべてのノードを切り替えるバージョンを選択します。
- (注) 複数の製品がある場合、すべての異なる製品の適切なバージョンを選択できます。1 つの製品に対してバージョンを切り替え、他の製品に対してはバージョンを切り替えないことも選択できます。
- ステップ 6** [Next (次へ)] をクリックします。
- ステップ 7** バージョン切り替えタスクを開始する日時を選択します。バージョン切り替えタスクをスケジュールするには以下のオプションがあります。
- [Schedule for a specific time (特定の時間に対するスケジュール)] を選択してバージョン切り替えタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。
- (注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。
- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually (手動によるタスクの開始)] を選択します。
 - [終了 (Finish)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)] を選択します。
- (注) [モニタリング (Monitoring)] ページからタスクを開始することもできます。

- サーバが新しいバージョンに自動的に切り替えるようにするには、[正常なアップグレード後に新規バージョンに自動的に切り替え (Automatically switch to new version after successful upgrade)]の横のチェックボックスをオンにします。

ステップ 8 [Next] をクリックします。

ステップ 9 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
ペンシル アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)]ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)]アイコンは[手順の編集 (Edit Step)]ウィンドウを開きます。利用可能なノードのリストから、この手順でバージョンを切り替える必要のあるノードを選択します。利用可能なノードは、バージョン切り替えタスクのために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。

重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。

- [手順完了後タスクを一時停止 (Pause task after step completes)]オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

ステップ 11 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [次へ (Next)]ボタンは有効なままであるため、ユーザはこのボタンをクリックして設定エラーについて確認することができます。

ステップ 12 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)]セクションを使用します。必要に応じてタスクにメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ13 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(5 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(10 ページ\)](#)

サーバ再起動タスク

アップグレードタスクに対してサポートされているアプリケーションとリリースを確認するには、関連項目の「「サポートされているアップグレードと移行」」および「「輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス」」を参照してください。

関連トピック

[アプリケーションとバージョンに対してサポートされているタスク \(5 ページ\)](#)

[輸出規制対象ソフトウェアと輸出規制対象外ソフトウェアのアップグレードパス \(10 ページ\)](#)

サーバ再起動タスクの作成

再起動タスクを作成または編集するには、[タスクの再起動 (Restart Task)] ウィザードを使用します。

スケジュールした時間にクラスタ内の1つ以上のノードを自動的に再起動するために再起動タスクを作成または編集するには、この手順に従います。

始める前に

1. 再起動するクラスタのクラスタ ディスカバリを実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにします。[クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) を参照してください。
2. クラスタ内の各アプリケーションに対して、そのサーバで Platform Administrative Web Service がアクティブであることを確認してください。
3. アプリケーションの仮想マシンで Cisco Prime Collaboration Deployment 再アドレス付けタスクを使用する場合は、IP とホスト名を (どちらか一方だけまたは両方を同時に) 変更するためのアプリケーションのルールに従っていることを確認します。

手順

ステップ1 ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから [タスク (Task)] > [サーバ再起動 (Server Restart)] を選択します。

ステップ2 [サーバ再起動タスクの追加 (Add Server Restart Task)] ウィンドウをクリックします。
[再起動タスクの追加 (Add Restart Task)] ウィザードが表示されます。

- ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[このサーバ再起動タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Server Restart Task)] にサーバ再起動タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** [クラスタ (Clusters)] ドロップダウンリストから、ノードを再起動したいクラスタを選択します。
- ステップ 5** テーブルから、再起動するノードを選択します。ノードを選択しないと続行できません。
- ステップ 6** [Next (次へ)] をクリックします。
- ステップ 7** サーバ再起動タスクを開始する日時を選択します。再起動タスクをスケジュールする以下のオプションがあります。

- [特定の時間に対するスケジュール (Schedule for a specific time)] を選択して再起動タスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。

(注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [手動によるタスクの開始 (Start task manually)] を選択します。
- [終了 (Finish)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)] を選択します。

(注) [モニタリング (Monitoring)] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 8 [Next (次へ)] をクリックします。

ステップ 9 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に準備されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で準備されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは [手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。この手順では、使用可能なノードのリストから再起動するノードを追加します。使用可能なノードは、再起動のために選択したものです。

- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。どの手順にも割り当てられていないノードは、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。

重要 すべてのノードを割り当ててまでは次の手順に進むことができません。

- [手順完了後タスクを一時停止 (Pause task after step completes)] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。タスクを完了するには、次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

ステップ 11 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [次へ (Next)] ボタンは有効なままであるため、ユーザはこのボタンをクリックして設定エラーについて確認することができます。

ステップ 12 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを参照してください。必要に応じてタスクにメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 13 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

再アドレス付けタスク

再アドレス付けタスクの作成

クラスタ内の1つまたは複数のノードのホスト名またはIPアドレスを変更するには、再アドレス付けタスクを使用します。再アドレス付け機能を使用するには、サーバがリリース10.0以上でなければなりません。

ホスト名と完全修飾ドメイン名 (FQDN) の違いに注意してください。ノードのネットワークレベルのDNSデフォルトドメイン名にホスト名を組み合わせたものが、ノードのFQDNになります。たとえば、ホスト名が「cucm-server」で、ドメインが「example.com」であるノードのFQDNは「imp-server.example.com」になります。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment では、ホスト名の変更だけがサポートされており、FQDNの変更はサポートされていません。

再アドレス付けタスクを作成または編集するには、[タスクの再アドレス付け (Readdress Task)] ウィザードを使用します。

始める前に

- まだ実行していない場合は、再アドレス付けするクラスタに対してクラスタ検出を実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにしてください。 [クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) を参照してください。
- アプリケーションの仮想マシンで Cisco Prime Collaboration Deployment 再アドレス付けタスクを使用する場合は、IP とホスト名を（どちらか一方だけまたは両方を同時に）変更するためのアプリケーションのルールに従っていることを確認します。

手順

-
- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから **[タスク (Task)] > [再アドレス付け (Readdress)]** を選択します。
- ステップ 2** **[再アドレス付けタスクの追加 (Add Readdress Task)]** をクリックします。
- ステップ 3** **[タスク名の指定 (Specify Task Name)]** ドロップダウンで、**[このリアドレス タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Readdress Task)]** にリアドレス タスクの名前を入力します。
- ステップ 4** **[Clusters (クラスタ)]** ドロップダウン リストから、ノードのアドレスを変更したいクラスタを選択します。クラスタ ノードを表示するには、**[View Nodes (ノードの表示)]** をクリックします。
- ステップ 5** **[Next (次へ)]** をクリックします。
- ステップ 6** ノードの横の **[Edit (編集)]** をクリックして、代替ホスト名、IP アドレス、サブネットマスクまたはゲートウェイを入力します。
- (注) DHCP がクラスタ用に設定されている場合、再アドレス付けタスクを使用して編集することはできません。
- ステップ 7** **[OK]** をクリックします。
- ステップ 8** **[次へ (Next)]** をクリックします。
- 重要** **[次へ (Next)]** をクリックすると、Cisco Prime Collaboration Deployment は自動的に検証テストを実行します。クラスタに対するテストが失敗した場合、失敗したテストについて説明するエラーメッセージが表示されます。タスクの作成を継続できますが、説明されたエラーを解決しないとタスクは失敗します。
- ステップ 9** 再アドレス付けタスクを開始する日時を選択します。再アドレス付けタスクをスケジュールする以下のオプションがあります。
- **[Schedule for a specific time (特定の時間に対するスケジュール)]** を選択して再アドレス付けタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。
- (注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually (手動によるタスクの開始)] を選択します。
- [Finish (完了)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[Start task immediately upon completion of wizard (ウィザードが完了したらタスクをすぐに開始)] を選択します。
(注) [Monitoring (モニタリング)] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 10 [Next (次へ)] をクリックします。

ステップ 11 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
上矢印	手順を上に向けて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に向けて先に実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは [手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこの手順に再アドレス付けするノードを追加します。使用可能なノードは、再アドレス付けのために選択したものです。

(注) IM and Presence Service サーバでは Cisco Prime Collaboration Deployment で再アドレス付けがサポートされないため、IM and Presence Service ノードには [編集 (Edit)] ボタンがありません。

- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。

重要 このタスクに対して選択されたすべてのノードを割り当てるまで次の手順に進むことはできません。

- Cisco Prime Collaboration Deployment は、再アドレス付けタスクの各シーケンス手順の後に強制一時停止を自動的に挿入します。
- 再アドレス付けタスクに対して、各手順に1つのノードのみ割り当てることができます。複数のノードを統合して単一の手順に割り当ててはできません。

ステップ 12 [OK] をクリックします。

ステップ 13 [次へ (Next)] をクリックします。

- (注) [次へ (Next)] ボタンは有効なままであるため、ユーザはこのボタンをクリックして設定エラーについて確認することができます。

ステップ 14 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを参照してください。必要に応じてタスクにメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 15 [終了 (Finish)] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

再アドレス付けタスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [手動開始 (Manual Start)] を選択した場合、タスクはタスク リストに表示されますが、開始されません。

手動開始するようにスケジュールされたタスクの場合、タスクを開始するには、このタスクに関連付けられている [開始 (Start)] ボタンをクリックします。

再アドレス付けタスクの実行中に、タスク内で再アドレス付けするサーバが複数ある場合、何らかのユーザ操作が必要となります。再アドレス付けタスク シーケンスには、サーバのアドレスが変更された後に強制一時停止が自動的に挿入されます。

強制一時停止を使用すれば、ユニファイドコミュニケーションのパブリッシャ ノード インターフェイス上の DNS エントリやサーバ エントリの更新などの手動手順を実行できます ([システム (System)] > [サーバ (Server)])。また、正常に登録されたサーバに関連付けられた電話機をチェックすることもできます。ユーザは、他のユニファイドコミュニケーション ノード用のインターフェイスで再アドレス付けタスクを再開する前に、次の手順を実行する必要があります。再アドレス付けタスクの再開後は、システムが更新を正しく複製します。

詳細については、『*Administration Guide for Cisco Unified Communications Manager*』を参照してください。

始める前に



重要 再アドレス付けタスクを実行する前に、特定の手順 (DNS サーバのエントリの更新など) を実行することが必要となる場合もあります。

再アドレス付けタスクを実行する前に、「*Administration Guide for Cisco Unified Communications Manager*」を必ず読んでください。

再アドレス付け後のタスク

サーバによりアドレスが適切に変更されたことを確認するには、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI に移動して [再開 (Resume)] をクリックし、タスクを再開します。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは再アドレス付けを実行するシーケンス内の次のサーバに進みます。サーバの再アドレス付けが検証されたら、強制一時停止を待機する手順を繰り返し、サーバの状態を確認し、タスクを再開します。

インストール タスク

Unified Communications Manager または IM and Presence サービス サーバを含むクラスタをフレッシュインストールするには、このタスクを使用します。既存のクラスタに新しいサーバを追加する場合は、このタスクは使用できません。

インストール タスクの作成

始める前に

1. VMware : 新しいクラスタのハードウェアを導入し、ESXi をインストールします。



(注) Cisco Prime Collaboration Deployment VM のホストと、アプリケーション VM のホストが、必要な仮想化ソフトウェアライセンスを使用していることを確認します。[仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ](#)を参照してください。

2. ISO ファイル : ターゲットリリースに必要な OVA および ISO イメージをダウンロードし、SFTP を使用して ISO ファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment の /fresh_install ディレクトリに転送します。



(注) ISO ファイルが起動可能である必要があります。



(注) PCD タスクに使用されているブート可能な ISO のファイル名を編集しないでください。

3. VMware : インストールするノードの VM を作成するために Cisco 推奨の OVA を導入します。手順 2 でダウンロードした Cisco OVA を使用して、ESXi ホスト上に適切な数のターゲット仮想マシンを作成します (クラスタにインストールするサーバごとに 1 つの新規仮想マシン)。新規 VM でネットワークを設定します。
4. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : 仮想マシンを含む ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加します。Cisco Prime Collaboration Deployment への ESXi ホストの追加についての詳細は、[ESXi ホスト サーバの追加 \(15 ページ\)](#) を参照してください。
5. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : インストールするノードとその関連仮想マシンを定義するために、新しいインストールクラスタを定義します (ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)]** > **[クラスタ (Clusters)]** を選択します)。[\(フレッシュインストールのために新規クラスタを追加 \(18 ページ\)\)](#) を参照)。
6. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : 電子メール通知の設定 (オプション)

- ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[管理 (Administration)] > [電子メール通知 (Email Notification)] を選択します。
 - 電子メール通知が設定されている場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは移行タスク中に発生する可能性のあるエラー状態に関する電子メールを送信します。
7. Cisco Prime Collaboration Deployment GUI : インストール タスクを作成します。
 8. インストール タスクを作成する前に、DNS サーバにインストールするクラスタ ノードの IP アドレスまたはホスト名を必ず入力してください。

インストール タスクの追加

スケジュールされた時間にクラスタに1つ以上のノードを自動的にインストールするには、次の手順に従ってください。

手順

-
- ステップ 1** ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから [タスク (Task)] > [インストール (Install)] を選択します。
 - ステップ 2** [インストール タスクの追加 (Add Install Task)] をクリックします。
 (注) インストール タスクがない場合、ウィザードを実行する前提条件が記載された [クラスタのインストール (Cluster Installation)] ポップアップ ウィンドウが表示されます。[Close (閉じる)] をクリックしてポップアップ ウィンドウを閉じます。
 - ステップ 3** [タスク名の指定 (Specify Task Name)] ドロップダウンで、[このインストール タスクのニックネームを選択 (Choose a Nickname for this Install Task)] にインストール タスクの名前を入力します。
 - ステップ 4** [インストールクラスタ (Installation Cluster)] ドロップダウンリストから、インストールするノードが置かれたクラスタを選択します。
 インストールと同時にアップグレードパッチを適用する場合は、[はい (Yes)] のラジオ ボタンをクリックし、しない場合は [いいえ (No)] のラジオ ボタンをクリックします。
 - ステップ 5** [Next] をクリックします。
 - ステップ 6** それぞれの [参照 (Browse)] ボタンをクリックして、Unified Communications Manager Installation ファイルおよび Cisco Unified Presence Installation ファイルをサーバから選択します。
 インストールと同時にアップグレードパッチを適用した場合は、そのパッチファイルを Unified Communications Manager と Cisco Unified Presence のインストール ファイルとともに参照します。
 インストール ファイルと同じエンジニアリング スペシャル (ES) /サービス アップデート (SU) バージョンのパッチ ファイルを選択する必要があります。

重要 ISO ファイルは、Prime Collaboration Deployment がローカル SFTP として使用されている場合に、/fresh_install の下のローカル SFTP ディレクトリ内に置かれていれば、ここに表示されます。任意のリモートの SFTP が移行クラスタに関連付けられている場合、ファイルはリモートの SFTP 内に存在する必要があります。詳細は、このセクションの最初のタスク管理情報を参照してください。

(注) デフォルトでは、選択したノードにインストールされたファイルのみ表示されます。インストールファイルを選択するオプションは、クラスタ内で現在サポートされる選択した製品タイプおよびアプリケーションに対してのみ使用できます。

(注) インストール タスクを作成する際は、ISO ファイルの選択時に、クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていることを確認してください。クラスタ ノードに関連付けられたすべての必要な SFTP サーバで ISO ファイルが共有されていない場合、有効なファイルは、移行が可能な状態であっても、表示されません。すべての ISO ファイルを表示するには、[表示 (Show)] ドロップダウン リストで [すべて (All)] を選択します。

(注) リモート SFTP サーバを追加するときは、新規インストール/移行とアップグレードのために、異なる SFTP ディレクトリを維持する必要があります。新規インストール、移行、およびアップグレード用に同じリモート SFTP サーバを追加することはできませんが、新規インストール、移行、およびアップグレードのためのディレクトリは、違うものにします。

ステップ 7 [Choose File (ファイルを選択)] をクリックします。

ステップ 8 [Next] をクリックします。

(注) 有効なアップグレードファイルが選択されていない場合、[次へ (Next)] ボタンがグレー表示になります。

ステップ 9 アップグレードタスクを開始する日時を選択します。アップグレードをスケジュールする以下のオプションがあります。

- [Schedule for a specific time (特定の時間に対するスケジュール)] を選択してアップグレードタスクの開始の日時を入力します。設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイムゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイムゾーンに基づいています。

(注) 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [手動によるタスクの開始 (Start task manually)] を選択します。
- [終了 (Finish)] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始 (Start task immediately upon completion of this wizard)] を選択します。

(注) [Monitoring (モニタリング)] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 10 [Next (次へ)] をクリックします。

ステップ 11 タスクを完了するための一連の手順を指定します。次の選択肢があります。

オプション	説明
鉛筆 アイコン	手順を編集します。
ページ アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。[Publisher (パブリッシャ)] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に移動して先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に移動して後で実行されるようにします。

- [鉛筆 (Pencil)] アイコンは[手順の編集 (Edit Step)] ウィンドウを開きます。使用可能なノードからこのステップにインストールするノードを追加します。使用可能なノードはこのクラスタにインストールすることを選択したノードです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 1つの手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できません。

重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。

- Unified Communications Manager リリース 10.0(1) ~ 10.5(1) をインストールする場合は、パブリッシャ ノードのインストールの完了後にタスクが一時停止します。パブリッシャ ノードにサブスクライバ ノードの詳細を入力してから、手動で次の手順を開始してください。Cisco Unified Communications Manager リリース 10.5(2) 以降は、フレッシュ インストール中に一時停止しません。インストール タスクは自動的に続行されます。

ステップ 12 [OK] をクリックします。

ステップ 13 [次へ (Next)] をクリックします。

(注) [Next (次へ)] ボタンは有効なままのため、ユーザはこれをクリックして不良構成を確認することができます。

ステップ 14 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[レビュー (Review)] セクションを参照してください。必要に応じて、タスクに関するメモを追加できます。メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 15 [終了 (Finish)] をクリックすると、インストール タスクがスケジュールされます。

重要 Unified Communications Manager ノードと IM and Presence サービス ノードの両方を使用してフレッシュ インストール クラスタを作成する場合、どの IM and Presence サーバがパブリッシャであるかを指定してください。後でこのタスクを実行する場合、Unified Communications Manager パブリッシャのインストール後に、サブスクリイバ ノードが Unified Communications Manager パブリッシャを入力できるように一時停止する際に ([システム (System)] > [サーバ (Server)] GUI メニュー)、IM and Presence サービス パブリッシャが、このリストに最初に追加される IM and Presence サービス サーバであることが重要です。これにより、IM and Presence サービス が最初のノードとしてインストールされます。

(注) Unified Communications Manager パブリッシャでは、パブリッシャのインストール後に、クラスタ内のすべての後続サーバを Cisco Unified Communications Manager Administration GUI に追加する必要があります。この要件のため、インストール タスクの作成時に、Unified Communications Manager (リリース 10.0(1) ~ 10.5(1)) パブリッシャがインストールされた後、Cisco Prime Collaboration Deployment はシーケンス手順内に強制一時停止を自動的に挿入します。

インストール タスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [手動開始 (Manual Start)] を選択した場合、タスクはタスク リストに表示されますが、開始されません。この場合、インストールタスクに関連付けられている検証ボタンがあります。タスクを実行する前に確認するには、[検証 (Validation)] をクリックします。タスクを開始する前に検証を実行することで、そのタスクで発生する可能性のある問題 (ISO ファイルの欠落やオフ状態にない VM など) について警告が出されます。このため、タスクを開始する前にこれらの問題を解決できます。



(注) [検証 (Validation)] ボタンをクリックしてもタスクは開始されず、タスクが開始された場合に使用されるリソースの確認だけが実行されます。

手動開始するようにスケジュールされたタスクの場合、タスクを開始するには、このタスクに関連付けられている [開始 (Start)] ボタンをクリックします。

フレッシュ インストール タスクに 1 つ以上のサーバを含まれるとき、タスク実行中にユーザの介入が必要となる場合があります。インストールタスクにより、まず Unified Communications Manager パブリッシャが自動的にインストールされてから、タスクシーケンスに強制一時停止が挿入されます。この強制一時停止は、インストールタスクを停止します。これにより、ユーザは新規インストールされたパブリッシャの Unified Communications Manager GUI に移動して、クラスタ内の他のサーバを [システム (System)] > [サーバ (Servers)] ウィンドウに追加することができます。後続ノードを定義するには、[新規追加 (Add New)] をクリックし、サーバを設定します。

このクラスタにインストールされるすべてのサブスクリイバ (Unified Communications Manager サブスクリイバ、IM and Presence サービス パブリッシャ、および IM and Presence サービス サ

ブスクリバ) が Unified Communications Manager パブリッシャ GUI に追加されたら、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI の [モニタリング (Monitoring)] ページに戻り、[再開 (Resume)] ボタンをクリックしてインストール タスクを再開します。インストール タスクが継続し、Unified Communications Manager または IM and Presence サービス ソフトウェアが後続のサーバにインストールされます。

インストール タスクのキャンセル

この手順は、フレッシュインストールタスクまたは移行タスク内の既存のインストールをキャンセルするために使用します。

手順

-
- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、メインメニューから [タスク (Task)] > [インストール (Install)] を選択します。既存のインストール タスクが [タスク リスト (Task List)] セクションに表示されます。
- ステップ 2** 既存のインストール タスクを選択して、[キャンセル (Cancel)] をクリックします。

(注) 現在実行中のインストールタスクをキャンセルする場合は、仮想マシンを削除してから、再作成する必要があります。

選択したインストール タスクの仮想マシンがオフになり、タスク ステータスが [キャンセル (Canceled)] として表示されます。

インストール後のタスク

インストールタスクの完了後に行う必要がある操作はありません。新しいクラスタは使用可能な状態になっています。

クラスタ サポートの編集と展開

Cisco Unified Communications Manager クラスタを導入すると、Cisco Prime Collaboration Deployment のクラスタの編集および展開サポート機能により、移行に関連する問題や障害を排除できます。次の操作を実行できます。

- IM and Presence サービスを既存の Unified Communications Manager クラスタに追加します。
- 新しいノードを既存のクラスタに追加します (サブスクリバノードを追加するなど)。
- クラスタからインストールを実行するノードを選択します。

この機能は、以前にインストールされた 10.x 以降のシステムでのみ機能し、フレッシュインストール タスクを使用してノードを追加します。



- (注) 既存のクラスタに新しいノードを追加してインストールした後、検出タスクを実行すると、新しいノードを持つクラスタ全体が検出されます。

新しいインストール クラスタの編集/削除

新しく追加されてまだインストールされていないノードを編集または削除します。インストールされていないノードは、アクティブとして表示されます。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
- ステップ 2** クラスタタイプが [新規インストール (New Install)] のクラスタをクリックし、[編集 (Edit)] をクリックします。
- ステップ 3** [クラスタ名の指定 (Specify Cluster Name)] セクションであらかじめ入力されたクラスタ名を表示し、[次へ (Next)] をクリックします。
- ステップ 4** [仮想マシンを追加 (Add Virtual Machines)] セクションで、既存のノードからノードを選択して [編集 (Edit)] をクリックします。
[ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 5** [ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウで、ノードの詳細を編集し、[OK] をクリックします。
- ステップ 6** [クラスタ全体の設定を実行 (Configure Cluster Wide Settings)] セクションで、クラスタのすべてのノードの OS 管理クレデンシャル、アプリケーションクレデンシャル、セキュリティパスワード、SMTP 設定、証明書情報を必要に応じて編集し、[次へ (Next)] をクリックします。
- (注) FIPS モード、コモンクライテリア、または拡張セキュリティ モードを有効にする前に、セキュリティパスワードが最小 14 文字以下であることを確認します。
- ステップ 7** (任意) [DNS 設定を実行 (Configure DNS Settings)] セクションで、移行クラスタ ノードの DNS 設定を編集し、[次へ (Next)] をクリックします。
- (注) クラスタの前のノードが DNS とドメインで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になり、自動入力されます。前のノードが DNS またはドメインで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。
- ステップ 8** [NTP 設定を実行 (Configure NTP Settings)] セクションで、クラスタ内のノードの NTP サーバの設定を編集し、[次へ (Next)] をクリックします。
- (注) このセクションで行った変更は、パブリッシャ ノードのみに適用されます。
- ステップ 9** (任意) [NIC 設定を実行 (Configure NIC Settings)] セクションで、MTU サイズに 552 ~ 1500 の値を入力し、[選択したものへ適用 (Apply to Selected)]、[次へ (Next)] の順にクリックします。

ステップ 10 [タイムゾーンの設定 (Configure Time Zones)] で、ノードを選択し、[リージョン (Region)] リストボックスと [タイムゾーン (Time Zones)] リストボックスでリージョンとタイムゾーンを編集して [選択したものに適用 (Apply to Selected)]、[終了 (Finish)] の順にクリックします。

(注) クラスタの前のノードがタイムゾーンで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になり、自動入力されます。前のノードがタイムゾーンで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。

これにより、変更内容が保存されます。1つのクラスタで1つまたは複数のノードをインストールできます。詳細については、[インストールタスクの追加 \(52 ページ\)](#) を参照してください。

検出されたクラスタの編集/削除

まだインストールされていないノードを編集または削除できます。インストールされていないノードはアクティブとして表示され、インストールされたノードは非アクティブとして表示されます。



(注) 新しいノードを追加またはインストールした後は、この機能でノードを削除することができなくなります。アプリケーション管理 Web ページまたは CLI を使用してインストール済みの既存クラスタからノードを削除する必要があります。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
- ステップ 2** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
- ステップ 3** クラスタタイプが [Discovered (検出済み)] のクラスタをクリックし、[編集 (Edit)] をクリックします。
- ステップ 4** [クラスタ名の指定 (Specify Cluster Name)] セクションでクラスタ名を入力し、[次へ (Next)] をクリックします。
- (注) 検出されたクラスタがすでにインストールされている場合、クラスタ名は編集できません。
- ステップ 5** [仮想マシンを追加 (Add Virtual Machines)] セクションで、インストールされていない既存のノードからノードを選択して [編集 (Edit)] をクリックします。
[ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 6** [ノードの追加 (Add Node)] ウィンドウで、ノードの詳細を編集し、[OK] をクリックした後、[仮想マシンを追加 (Add Virtual Machines)] セクションで [次へ (Next)] をクリックします。

(注) 既存のクラスタに新しいノードを追加すると、新しいノードは [パブリッシャ (Publisher)] 機能を使用できません。

ステップ 7 [クラスタ全体の設定を実行 (Configure Cluster Wide Settings)] セクションで、クラスタのすべてのノードの OS 管理クレデンシヤル、アプリケーションクレデンシヤル、セキュリティパスワード、SMTP 設定、証明書情報を確認し、[次へ (Next)] をクリックします。

(注) このセクションのフィールドは、クラスタタイプが [新規インストール (New Install)] の場合にのみ編集可能です。

ステップ 8 (任意) [DNS 設定を実行 (Configure DNS Settings)] セクションで、移行クラスタ ノードの DNS 設定を編集し、[次へ (Next)] をクリックします。

(注) クラスタの前のノードが DNS とドメインで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になります。前のノードが DNS またはドメインで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。

ステップ 9 [NTP 設定を実行 (Configure NTP Settings)] セクションで、クラスタ内のノードの NTP サーバの設定を確認し、[次へ (Next)] をクリックします。

(注) このセクションのフィールドは編集できません。

ステップ 10 (任意) [NIC 設定を実行 (Configure NIC Settings)] セクションで、アンインストールしたノードのサーバの詳細を編集し、552~1500 の MTU サイズを入力して [次へ (Next)] をクリックします。

ステップ 11 [タイムゾーンの設定 (Configure Time Zones)] で、ノードを選択し、[リージョン (Region)] リストボックスと [タイムゾーン (Time Zones)] リストボックスでリージョンとタイムゾーンを編集して [選択したものへ適用 (Apply to Selected)]、[終了 (Finish)] の順にクリックします。

(注) クラスタの前のノードがタイムゾーンで同じ値を持つ場合、他のノードの値は新しいノードのデフォルト値になります。前のノードがタイムゾーンで複数の値を持つ場合、デフォルト値は適用されません。

これにより、変更内容が保存されます。1つのクラスタで1つまたは複数のノードをインストールできます。詳細については、[インストールタスクの追加 \(52 ページ\)](#) を参照してください。

タスク ステータスのモニタ

Cisco Prime Collaboration Deployment タスクのステータスを確認するには、[モニタリング (Monitoring)] ページを使用します。



(注) [Monitoring (モニタリング)] ページで利用可能な情報については、[モニタリング ビュー要素](#)を参照してください。

手順

ステップ 1 [モニタリング (Monitoring)] ページを表示するには、メイン メニューで [モニタリング (Monitoring)] リンクをクリックします。

ステップ 2 [モニタリング (Monitoring)] ページの左側の列には、各タスクと現在のステータスを示すアイコンがリストされます。また、タスクのタイプ (移行、アップグレード、インストールなど) およびタスクのクラスタ ニックネームも表示されます。

タスクの開始時間も表示されます。この左側の列でタスクをクリックすると、そのタスクの詳細データが右側のパネルに表示されます。

ステップ 3 ページの右上のセクションは以下のデータを表示します。

- ステータス
- 開始時刻
- タスク データ (例: クラスタのニックネームや ISO 名)

タスクの詳細ログメッセージを表示するには、[View Log (ログの表示)] をクリックします。このログにエラーまたは警告が表示される場合、詳細を [トラブルシューティング (Troubleshooting)] のセクションで確認してください。

右上には、タスクに対して各種操作を実行できるボタンがあります。たとえば、タスクが一時停止中の場合は [再開 (Resume)] ボタンをクリックしてタスクを再開します。

ボタンはタスクの現在の状態に対して有効な場合に表示されます。たとえば、タスクの終了後には [キャンセル (Cancel)] ボタンは表示されず、代わりに [削除 (Delete)] ボタンが表示されます (タスクのデータを削除する場合)。

ステップ 4 ページの右下のセクションには、タスクの詳細な手順がその手順のステータスとともに表示されます。手順の説明を開くには、その手順に対応する三角形をクリックします。

各手順には、その手順のログメッセージを表示する [ログの表示 (View Log)] リンクがあります。

(注) [モニタリング (Monitoring)] ページは 3 分ごとに自動的に更新されます。自動更新を非アクティブにするには、[無効化 (Disable)] ボタンをクリックします。

[モニタリング (Monitoring)] ページの操作ボタン

- [開始 (Start)] : このボタンは、タスクが [タスクを手動で開始 (Start Task Manually)] 「」 オプションを使用して作成されている場合に表示されます。[開始 (Start)] ボタンをクリックすると、タスクが開始されます。
- [キャンセル (Cancel)] : タスクを取り消します。このボタンは、タスクがスケジュールされた状態または実行状態にある場合に表示されます。タスクがすでに起動している場合、このボタンはすでに完了した手順を元に戻すことはしませんが、タスクをすぐに停止します。
- [削除 (Delete)] : システムからタスクを削除します。これはタスクとその履歴すべてを削除します。
- [再開 (Resume)] : このボタンは、タスクが一時停止状態の場合に表示されます。これにより、ユーザは次の手順でタスクを再開できます。
- [再試行 (Retry)] : このボタンは、タスクが [エラーにより一時停止 (Pause due to error)] 「」 状態にある場合に表示されます。このボタンをクリックすると、エラーが原因で失敗したタスクの最後のステップが再試行されます。

自動更新

[モニタリング (Monitoring)] ページは 3 分ごとに自動的に更新されます。自動更新を無効にするには、[モニタリング (Monitoring)] ページの左上隅にある [無効 (Disable)] ボタンをクリックします。

管理ツール

E メール通知

電子メール通知機能は、特定のタスク イベントに関する詳細情報を含む E メール通知をユーザに送信します。すべての標準タスク イベント (タスクのスケジュール、開始、成功、一時停止、失敗またはキャンセル) について電子メールを送信するか、またはタスクエラーについてのみ電子メールを送信するかを選択できます。[すべてのタイプのタスクに E メールを送信する (Emails are sent for all types of tasks)] : クラスタ検出、アップグレード、移行、バージョン切り替え、再起動、フレッシュインストール、およびリアドレス。

[監査ログ設定 (Audit Log Configuration)] ウィンドウの [ログ ローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドで設定された値に到達したときにユーザに電子メール通知を送信するように指定できます。この電子メール通知は、監査ログファイルが削除または上書きされるため、そのバックアップを取るようにユーザに知らせます。

電子メールが送信される場合

標準モードで電子メール通知を受信することを選択した場合、タスクが以下の状態になった時点で電子メールメッセージが送信されます。

- Scheduled (スケジュール済)
- Failed to Schedule (スケジュールできませんでした)
- Started (開始)
- Successful (成功)
- Failed (不合格)
- Cancelled (キャンセル)
- Canceling (キャンセル中)
- Failed to Cancel (キャンセルできませんでした)
- Paused on Error (エラーのため一時停止)
- Paused (一時停止)
- Paused – Required (一時停止 - 必須)

エラーのみモードで電子メール通知を受信することを選択した場合、タスクが以下の状態になると電子メールメッセージが送信されます。

- Failed to Schedule (スケジュールできませんでした)
- Failed (不合格)
- Failed to Cancel (キャンセルできませんでした)
- Paused on Error (エラーのため一時停止)

XステップのPCDタスクの場合、1～Nのノードを操作すると、取得したタスクアクション、各ノード/タスク手順が完了したときにEメール通知が送信されます。

移行タスク：

- クラスタにスケジュールされたタスク
- クラスタに対して開始されたタスク
- 送信元ノード A 設定のエクスポート成功
- 送信元ノード B 設定のエクスポート成功
- 通知先ノード A インストール成功
- 通知先ノード B インストール成功
- 発信元ノード A UFF エクスポート成功

- ソース ノード A のシャットダウン成功
- 通知先ノード A UFF インポート成功
- 発信元ノード B UFF エクスポート成功
- ソース ノード B のシャットダウン成功
- 通知先ノード B UFF インポート成功
- タスクの完了/失敗

アップグレードタスク (COPs) :

- クラスタにスケジュールされたタスク
- クラスタに対して開始されたタスク
- ノード a にインストールされた COPs
- ノード b にインストールされた COPs
- タスクの完了/失敗

PCD フレッシュ インストール タスクまたは、アップグレードタスク (ISO) :

- クラスタにスケジュールされたタスク
- クラスタに対して開始されたタスク
- ノード A が完了しました
- ノード B が完了しました
- タスクの完了/失敗

PCD 再起動タスク :

- これらのノードにスケジュールされたタスク
- これらのノードに開始したタスク
- ノード A が再起動されました
- ノード B が再起動されました
- タスクの完了/失敗

PCD スイッチ バージョン タスク :

- これらのノードにスケジュールされたタスク
- これらのノードに開始したタスク
- ノード A が切り替えられました
- ノード B が切り替えられました

- タスクの完了/失敗

PCD リアドレス :

- これらのノードにスケジュールされたタスク
- これらのノードに開始したタスク
- ノード A がリアドレスされました
- ノード B がリアドレスされました
- タスクの完了/失敗

SFTP データストア

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、アップグレード、フレッシュインストール、および移行タスクによって使用される ISO および COP ファイルを保管するのに使用されるローカルの Secure File Transfer Protocol (SFTP) サーバとして機能します。



- (注) これらの手順は、Linux を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバにファイルを置く方法について説明します。SFTP クライアントの Linux マシンからファイルをプッシュできます。

移行またはフレッシュインストールタスク

以下の手順に従って、adminsftp アカウントおよび Cisco Prime Collaboration Deployment GUI (または任意の SFTP クライアントの CLI パスワード) を使用して ISO ファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに送信します。

手順

ステップ 1 Linux シェルから `sftp adminsftp@<Cisco Prime Collaboration Deployment server>` と入力し、パスワードを指定します (パスワードは CLI と GUI の両方で同じです)。

ステップ 2 ディレクトリを `fresh_install` ディレクトリに変更します。

例 :

Linux シェルから `cd fresh_install` と入力し、**Return** キーを押します。

ステップ 3 ISO ファイルをアップロードします。

例 :

たとえば、`put UCSInstall_UCOS_10.0.x.xxx.sgn.iso` と入力します。

アップグレードタスク

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでアップグレードタスクに使用される ISO ファイルまたは COP ファイルをアップロードするときに SFTP を使用するには、次の手順に従ってください。

手順

ステップ 1 Linux シェルから `sftp admin@sftp@<Cisco Prime Collaboration Deployment server>` と入力し、パスワードを指定します（パスワードは CLI と GUI の両方で同じです）。

ステップ 2 ディレクトリを `upgrade` ディレクトリに変更します。

例：

Linux シェルから `cd upgrade` と入力し、**Return** キーを押します。

ステップ 3 ISO ファイルまたは COP ファイルをアップロードします。

例：

たとえば、`put UCSInstall_UCOS_10.0.x.xxx.sgn.iso` と入力します。

ISO ファイル名の確認または表示

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)]** を選択します。

ステップ 2 このページでは、この Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの SFTP データストアに保管されるファイルを表示および管理できます。

サーバ上に保存される ISO および COP ファイルのファイル名およびディレクトリ内の場所（たとえば `fresh_install` または `upgrade`）を表示します。

ISO または COP ファイルの削除

Cisco Prime Collaboration Deployment GUI を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment SFTP サーバ上で ISO または COP ファイルを削除するには、以下の手順に従います。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment にログインします。

ステップ 2 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)] を選択します。

ステップ 3 ISO または COP ファイルの横のチェックボックスをオンにします。

ステップ 4 [削除 (Delete)] をクリックします。

重要 スペースを節約するため、不要になった ISO ファイルまたは COP ファイルを定期的に削除すること（特に Cisco Prime Collaboration Deployment サーバソフトウェアをアップグレードする前）をお勧めします。

リモート SFTPサーバサポート

リモート SFTPサーバサポート機能は、アップグレード、移行、およびフレッシュインストールに Cisco Prime Collaboration Deployment を活用します。この機能を使用すれば、Cisco Prime Collaboration Deployment 12.1(1) 以降でのみサポートされる、WAN 経由でストリーミングされるサイズの大きいアプリケーション イメージファイルに起因する問題を回避することができます。

この機能が有用な例を次の表に示します。

- 複数のクラスタが Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシンとは別のサイトに存在する、マルチサイト分散 IP テレフォニーなどの地理的に分散した導入。
- アプリケーション仮想マシンが Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシンとは別のサイトに存在する WAN 経由のクラスタリング (CoW)。
- Cisco Prime Collaboration Deployment を中央データセンターに置く導入（ただし、Cisco Unified Communications Manager クラスタは WAN 経由のリモート）。

Cisco Unified Communications Manager のアップグレードに使用されるこれらの SFTP サーバは、Cisco Unified Communications Manager のアップグレードに使用される SFTP サーバと同じです。次に、アップグレードに使用されるサポート対象の SFTP サーバのリストを示します。

- Open SSH
- Cygwin
- Titan



(注) リモート SFTP サーバサポートは、アップグレード、移行、およびフレッシュインストールタスクで利用できます。

リモート SFTP サーバの追加

始める前に

移行またはフレッシュインストールの場合、ESXi ホスト上で NFS として使用するリモート SFTP サーバを手動でマウントします。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバとデータストア (SFTP Servers and Datastore)] を選択します。
このウィンドウの [SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。
- ステップ 2** [SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] テーブルで、[サーバを追加 (Add Server)] をクリックします。
[外部ファイルアクセスの追加 (Add external file access)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 3** [インストール/移行 (Install/Migration)] または [アップグレード (Upgrade)] ラジオ ボタンをクリックします。
- ステップ 4** [アドレスおよびアクセスのクレデンシャル (Address and access credentials)] セクションで、[IP/ホスト名 (IP/HostName)]、[ユーザ名 (Username)]、[パスワード (Password)] の各フィールドに値を入力します。
- ステップ 5** インストールまたは移行のタスク タイプの場合、[サーバのデータストア ディレクトリへのリモート NFS パス (Remote NFS Path to Datastore Directory on Server)] セクションで、[ディレクトリ (Directory)] フィールドにディレクトリ パスを入力し、[NFS サーバ名 (NFS Server Name)] フィールドに NFS サーバ名を入力します。

NFS サーバを追加する場合、SFTP のログイン情報は、ESXi ホストで設定されているパスと完全に一致するディレクトリを指す必要があります。したがって、SFTP ユーザは、NFS マウントした外部 ESXi と同じパスに対する読み取りアクセス権を持っている必要があります。
- ステップ 6** アップグレードタスク タイプの場合、[サーバのデータストアディレクトリへのリモート SFTP パス (Remote SFTP Path to Datastore Directory on Server)] で、[ディレクトリを追加 (Add Directory)] ボタンをクリックし、[ディレクトリ (Directory)] フィールドに値を追加します。

(注) アップグレードでは、ディレクトリに .iso データストアファイルが含まれていることを確認します。
- ステップ 7** (任意) [追加情報 (Additional Information)] セクションで、[説明 (Description)] フィールドに説明を入力します。
- ステップ 8** [追加 (Add)] をクリックします。

インストールまたは移行タスク タイプのリモート SFTP サーバの追加に成功すると、ダイアログ ボックスが表示されます。ダイアログ ボックスには、特定の NFS ディレクトリがマウント

された Prime Collaboration Deployment にすでに追加されている ESXi ホストが、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** の下にリストされます。

(注) SFTP サーバが追加されていない場合、次のいずれかのエラーメッセージが表示されます。

- **[接続タイムアウト (Connection Timeout)]** : タイムアウトにより、SFTP サーバへの接続が失敗したことを示します。
- **[ログイン失敗 (Login Failure)]** : SFTP サーバへのログインに失敗したことを示します。
- 「ディレクトリが見つかりません (Directory Not Found)」 : 選択されたディレクトリが SFTP サーバに見つからないことを示します。
- 「ディレクトリは既に入力されています (Directory Already Entered)」 : 選択したディレクトリが既にディレクトリのリストに存在することを示します。[ディレクトリを追加 (Add Directory)] ボタンをクリックして使用可能なディレクトリのリストを表示できます。
- **[ディレクトリは既に存在しています (Directory Already Exists)]** : 入力したディレクトリが既に SFTP サーバに存在することを示します。
- **[必須フィールドが入力されていません (Mandatory Fields Missed)]** : 必須フィールドに値が入力されていないことを示します。
- 「指定されたサーバが見つかりません (Mentioned Server Could Not Be Located)」 : 入力されたサーバが DNS で設定されていないことを示します。このエラーメッセージは、IP アドレスの代わりにホスト名を入力すると表示されます。
- **[インベントリに ESXi ホストがない (No ESXi Hosts in Inventory)]** : ESXi ホストが追加されていないことを示します。このエラーは、インストールまたは移行のタスク タイプのリモート SFTP を追加しようとして、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** ページに追加された ESXi ホストがないために、指定の NFS マウントが見つからないときに表示されます。
- **[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** でリストされている ESXi ホスト上で特定の NFS パス/ディレクトリが見つかりませんでした (Could not find given NFS path/Directory on the listed ESXi host(s) under Inventory > ESXi Hosts) : このエラーは、インストールまたは移行のタスク タイプのリモート SFTP を追加しようとしたときに表示され、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** ページに追加されたいずれかの ESXi に、指定の NFS ディレクトリが見つからないと表示されます。

[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] テーブルに、追加されたリモート SFTP サーバが表示されます。[SFTP/データストア ファイル (SFTP/Datastore Files)] テーブルに、リモート SFTP サーバと Cisco Prime Collaboration Deployment からのファイルのリストが表示されます。また、既存の Cisco Prime Collaboration Deployment サーバが自動的に追加され、Cisco Prime Collaboration Deployment の upgrade フォルダと fresh_install フォルダのファイル

が [SFTP/データストア ファイル (SFTP/Datastore Files)] テーブルにデフォルトで表示されます。

ノードをリモート SFTP サーバに関連付ける

始める前に

- SFTP サーバを追加します。
- SFTP サーバへの関連付けのために選択したクラスタ ノードのステータスが、[スケジュール済み (Scheduled)]、[実行中 (Running)]、または [Wait_for_manual_start] でないことを確認します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] を選択します。
[クラスタ (Clusters)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 2** 既存のクラスタを検出するには、[クラスタの検出 (Discover Cluster)] ボタンをクリックします。クラスタを検出するには、[クラスタの検出 \(12 ページ\)](#) の手順を参照してください。
- ステップ 3** [クラスタ ノード (Cluster Nodes)] テーブルの利用可能なクラスタ ノードからクラスタ ノードを選択し、[編集 (Edit)] をクリックします。
[ノードの編集 (Edit Node)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 4** [SFTP サーバ (SFTP Server)] ドロップダウンリストから SFTP サーバを選択します。
デフォルトでは、このフィールドには SFTP サーバとして [localhost] オプションが表示されます。
- ステップ 5** [OK] をクリックします。
選択したクラスタ ノードに SFTP サーバが関連付けられ、[クラスタ ノード (Cluster Nodes)] テーブルの [SFTP サーバ (SFTP Server)] 列に詳細が表示されます。

リモート SFTP サーバの編集

既存のリモート SFTP サーバの場合は、ユーザ名、パスワード、説明などの詳細を編集できます。他のフィールド値を編集するときに、リモート SFTP サーバに複数のディレクトリを追加することもできます。

始める前に

- クラスタ ノードが、編集対象として選択したリモート SFTP サーバ ディレクトリに関連付けられていることを確認します。

- SFTP サーバにインストール、移行、またはアップグレードタスクが関連付けられていないことを確認します。

手順

-
- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、**[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバとデータストア (SFTP Servers and Datastore)]** を選択します。
このウィンドウの **[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** **[SFTP および NFS ファイルアクセス (SFTP and NFS File access)]** テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。
- ステップ 2** **[SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)]** **[SFTP および NFS ファイルアクセス (SFTP and NFS File access)]** テーブルから、SFTP サーバの **[編集 (Edit)]** をクリックします。**[SFTP サーバを編集 (Edit SFTP Server)]** ウィンドウが表示されます。
- ステップ 3** インストールタスクまたは移行タスクの場合、**[アドレスおよびアクセスのクレデンシャル (Address and access credentials)]**、**[サーバのデータストアディレクトリへのリモート NFS パス (Remote NFS Path to Datastore Directory on Server)]**、**[NFS サーバ名 (NFS Server Name)]**、および **[追加情報 (Additional Information)]** の各セクションのフィールドの値を編集します。
インストールまたは移行タスクタイプのリモート SFTP サーバの編集に成功すると、ダイアログボックスが表示されます。ダイアログボックスには、特定の NFS ディレクトリがマウントされた Prime Collaboration Deployment にすでに追加されている ESXi ホストが、**[インベントリ (Inventory)] > [ESXi ホスト (ESXi Hosts)]** の下にリストされます。
- ステップ 4** アップグレードタスクの場合、**[アドレスおよびアクセスのクレデンシャル (Address and access credentials)]**、**[サーバのデータストアディレクトリへのリモート SFTP パス (Remote SFTP Path to Datastore Directory on Server)]**、**[追加情報 (Additional Information)]** の各セクションのフィールドの値を編集します。
[サーバのデータストアディレクトリへのリモート SFTP パス (Remote SFTP Path to Datastore Directory on Server)] セクションで、**[ディレクトリの追加 (Add Directory)]** ボタンをクリックすると、既存のディレクトリを編集できます。複数のディレクトリを追加することもできます。
- ステップ 5** **[保存 (Save)]** をクリックします。
-

リモート SFTP サーバの削除

Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションで利用可能なリモート SFTP サーバを複数削除できます。ただし、データストアは削除できません。

始める前に

- 削除対象として選択した SFTP サーバを使用しているクラスタ ノードで、インストール、移行、またはアップグレードタスクが関連付けられておらず、実行中でないことを確認します。
- 削除する SFTP サーバからクラスタ ノードの関連付けを解除します。



(注) 削除対象として選択した SFTP サーバを使用しているクラスタ ノードで、インストール、移行、またはアップグレードタスクが関連付けられておらず、実行中でない場合であっても、クラスタ ノードの関連付けを解除できます。

- 削除する SFTP サーバのノードの関連付けを、remote/external SFTP サーバから localhost SFTP サーバに変更します。



(注) remote/external SFTP サーバから localhost SFTP サーバに変更しない場合、クラスタの関連付けがリモート SFTP サーバから localhost SFTP サーバに変わり、選択した SFTP サーバが削除されます。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)] を選択します。
このウィンドウの [SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。
- ステップ 2** [SFTPサーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] 表内の利用可能な SFTP ファイルおよびデータストアファイルから、削除するリモート SFTP サーバを選択し、チェックボックスをオンにします。
- ステップ 3** [Delete] をクリックします。

ローカル SFTP/データストア ISO ファイルの削除

Cisco Prime Collaboration Deployment 仮想マシンでローカルに実行している SFTP サーバから ISO ファイルと COP ファイルを削除できます。ただし、リモート SFTP サーバから ISO ファイルを削除することはできません。

始める前に

削除対象として選択した SFTP ファイルとデータストア ISO ファイルが、[スケジュール済み (Scheduled)]、[実行中 (Running)]、または [Wait_for_manual_start] のアップグレードに関連付けられていないことを確認します。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[インベントリ (Inventory)] > [SFTP サーバおよびデータストア (SFTP Servers and Datastore)] を選択します。

このウィンドウの [SFTP サーバ/データストア (SFTP Servers/Datastore)] テーブルには、デフォルトで PCD の詳細が表示されます。

ステップ 2 [SFTP/データストアファイル (SFTP/Datastore Files)] 表内の利用可能な SFTP ファイルおよびデータストアファイルから、削除するリモート SFTP ファイルおよびデータストアファイルを選択し (複数可) 、チェックボックスをオンにします。

(注) リモート SFTP ファイルは削除できません。

ステップ 3 [Delete] をクリックします。

ディスク領域警告レベル

この機能は、[ディスク領域警告レベルの設定 (Disk Space Warning Level Configuration)] ウィンドウを通してディスク領域警告レベルを表示または設定するために使用します。空きディスク領域の値が警告レベルのディスク領域として割り当てた値を下回ると、システムがタスクを実行するためのディスク領域が不足していることを警告します。

ディスク領域警告レベルの設定

この手順は、システムがタスクを実行するためのディスク領域が不足していることを警告する空きディスク領域のしきい値を設定するために使用します。



(注) ディスク領域警告レベルは、移行タスクとインストールタスクに適用され、検証されます。このレベルは、Cisco Prime Collaboration Deployment へのログイン時にも検証されます。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [ディスクスペース警告レベル (Disk Space Warning Level)] を選択します。

[ディスク領域警告レベル (Disk Space Warning Level)] ウィンドウが開いて、合計ディスク領域と空きディスク領域が表示されます。

ステップ 2 [合計ディスク領域 (GB) (Total Disk Space (GB))] フィールドと [空きディスク領域 (GB) (Available Disk Space (GB))] フィールドで合計ディスク領域と空きディスク領域を確認します。

ステップ 3 [警告レベルディスク領域 (GB) (Warning Level Disk Space (GB))] フィールドに、割り当てる値を入力します。

情報リンクをクリックして、入力した領域値がサーバで使用できるかどうかを確認することができます。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 5 (任意) [リセット (Reset)] をクリックします。
ページがデフォルト値でリセットされます。

監査ログ設定

ローカル syslog サーバとリモート syslog サーバの Cisco Prime Collaboration Deployment インターフェイスを介して監査ログを設定する場合に、この機能を使用します。監査ログは TCP モードの syslog サーバに送信されます。[監査ログ設定 (Audit Log Configuration)] ウィンドウを介して監査ログを設定し、次のタスクを実行できます。

- アプリケーション監査イベント レベルの設定
- リモート Syslog サーバ名または IP アドレスの設定
- 監査ログの有効化または無効化
- ログ ローテーションの有効化または無効化
- 最大ファイル数の設定
- ファイルサイズの設定
- ログ ローテーションの警告しきい値レベルの設定

監査ログの設定

次の手順を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーション経由でローカルとリモートの syslog サーバ用に監査ログを設定します。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [ログ設定の監査 (Audit Log Configuration)] を選択します。

- ステップ 2** アプリケーション監査イベント レベル ドロップダウン リストからいずれかのオプションを選択して監査レベルを設定します。
- ステップ 3** 監査ログがリモートサーバに記録されるように [リモート Syslog サーバ名/IP (Remote Syslog Server Name / IP)] フィールドにリモート syslog サーバの名前または IP アドレスを入力します。
- ステップ 4** (オプション) [ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] チェックボックスをオンまたはオフにして、ローカル監査ログを有効または無効にします。
- このフィールドをオンにすると、監査イベントがローカルサーバに記録されます。このフィールドをオフにすると、監査イベントがローカルサーバに記録されません。監査イベントには、ユーザ ID、ClientAddress、重大度、EventType、ResourceAccessed、EventuStatus、AuditCategory、CompulsoryEvent、ComponentID、CorrelationID、およびノード ID が含まれます。
 - このフィールドをオンにすると、[ログローテーションを有効にする (Enable Log Rotation)] フィールドがアクティブになります。
- ステップ 5** (任意) [ログローテーションを有効にする (Enable Log Rotation)] チェックボックスをオンまたはオフにして、ログローテーションを有効または無効にします。
- (注) [ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] が有効になっている場合に、このフィールドを設定できます。
- このフィールドをオンにすると、[最大ファイル数 (Maximum No of Files)]、[最大ファイルサイズ (MB) (Maximum File Size(MB))]、および [ログローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドを設定できます。[ローカル監査ログを有効にする (Enable Local Audit Log)] フィールドをオフにすると、これらのフィールドのデフォルト値が非アクティブのため適用されません。
- ステップ 6** [最大ファイル数 (Maximum No of Files)] フィールドに、サーバ上で作成可能な最大ファイル数を設定するための整数を入力します。
- ステップ 7** [最大ファイルサイズ (MB) (Maximum File Size (MB))] フィールドに、サーバ上で作成されるログの最大ファイルサイズを設定するための値を入力します。
- ステップ 8** [ログローテーション上書きに到達する際の警告しきい値 (%) (Warning Threshold for Approaching Log Rotation Overwrite(%))] フィールドに、警告しきい値を入力します。
- ステップ 9** [保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ 10** (任意) [リセット (Reset)] をクリックします。ページがデフォルト値でリセットされます。

カスタマイズされたログオンメッセージ

Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションにサインインしたときにアラートまたは警告メッセージを表示する場合に、この機能を使用します。[ログオンメッセージのカスタマ

イズ (Customized Logon Message)] ウィンドウを介してアラートまたは警告メッセージを設定し、次のタスクを実行できます。

- カスタマイズされたログインメッセージを含むファイルのアップロード
- ユーザ確認応答の有効化

カスタマイズされたログオンメッセージの設定

次の手順を使用して、ユーザが Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションにサインインしたときのカスタマイズされたログオンメッセージを設定します。

手順

- ステップ 1** Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションから、ナビゲーションの開閉ボタンをクリックし、[アドミニストレーション (Administration)] > [カスタマイズしたログオンメッセージ (Customized Logon Message)] を選択します。
- ステップ 2** [ファイルのアップロード (Upload File)] フィールドで、カスタマイズされたログオンメッセージを含むファイルの場所を参照します。
- ステップ 3** (任意) ユーザが受信したファイルに対するユーザ確認応答を有効または無効にする場合に、[ユーザの承認が必要 (Require User Acknowledgement)] チェックボックスをオンまたはオフにします。
このフィールドが有効になっている場合は、ユーザが同じ Web ブラウザのインスタンスから初めてサインアウトしたときに Cisco Prime Collaboration Deployment サインインページでアラートメッセージとして確認応答を取得します。
- ステップ 4** [ファイルのアップロード (Upload File)] をクリックします。
カスタマイズされたログオンメッセージを含むファイルがアップロードされ、ポップアップが開いて、ファイルアップロードステータスが表示されます。
- ステップ 5** (任意) [削除 (Delete)] をクリックします。
カスタマイズされたログオンメッセージを含むファイルが削除され、ポップアップが開いて、ファイル削除ステータスが表示されます。

FIPS 140-2 の準拠

連邦情報処理標準 (FIPS) は、暗号モジュールにおいて遵守が必要な要件が定義された、米国およびカナダ政府の認証規格です。暗号モジュールは、承認済みのセキュリティ機能 (暗号アルゴリズムとキー生成を含む) を実装し、暗号境界内に含まれるハードウェア、ソフトウェア、またはファームウェアのセットです。

Unified Communications Manager の特定のバージョンは、米国の National Institute of Standards (NIST) に従って FIPS 140-2 に準拠しており、FIPS モード レベル 1 に準拠して動作します。

Cisco Prime Collaboration Deployment は、シスコで確認済みのライブラリを使用することにより、FIPS 140-2 要件を満たします。

FIPS に準拠しているリリースに関する情報とそれらの認定を確認するには、<http://www.cisco.com/c/en/us/solutions/industries/government/global-government-certifications/fips-140.html> を参照してください。

拡張セキュリティ モードの詳細については、[拡張セキュリティ モードのサポート \(76 ページ\)](#) を参照してください。



- (注)
- 楕円曲線デジタル署名アルゴリズム (ECDSA) 暗号は、Cisco Prime Collaboration Deployment でサポートされません。そのため、**show cert list own** CLI コマンドで ECDSA 自己署名証明書が表示できる場合でも、TLS 接続時に、サーバが ECDSA 証明書をネゴシエートしません。
 - クラスタのすべてのノードを FIPS と非 FIPS のどちらかにする必要があります。

拡張セキュリティ モードのサポート

拡張セキュリティモードを有効にすると、以下のシステム拡張機能がデフォルトで有効になります。

- ユーザ パスワードとパスワード変更に関するより厳密なクレデンシャル ポリシーが実装される
- TCP がリモート監査ロギング用のデフォルトプロトコルになる
- FIPS モードが有効になる

拡張セキュリティモードを有効にしても、以下の機能はデフォルトで有効にならないため、個別に設定する必要があります。

- リモート監査ロギング：すべての監査ログとイベント **syslog** をローカルの場所とリモート **syslog** サーバの両方に保存する必要があります。
- システム ロギング：CLI ログインや間違ったパスワードの使用などのすべてのシステム イベントを記録して保存する必要があります。



- (注) UC クラスタを FIPS モードまたは拡張セキュリティ モードで設定した場合は、Cisco Prime Collaboration Deployment も同様のモードで設定する必要があります。この設定を使用すると、UC クラスタ固有のタスクを実行できます。

拡張セキュリティ モード用のクレデンシャル ポリシー

Cisco Prime Collaboration Deployment では、拡張セキュリティ モードが有効になっている場合に、パスワード変更に関するより厳密なクレデンシャルポリシーが自動的に実装されます。このモードでは、パスワード変更に関する次のデフォルトの要件が使用されます。

- パスワードの長さは 14 ～ 127 文字にする必要があります。
- パスワードには少なくとも 1 つの小文字、1 つの大文字、1 つの数字 および 1 つの特殊文字が含まれている必要があります。
- 過去 24 回以内に使用したパスワードを再使用することはできません。
- パスワードの最短有効期間は 1 日、最長有効期間は 60 日です。
- 新たに生成されるパスワードの文字列では、古いパスワードの文字列と少なくとも 4 文字が異なる必要があります。

このモードが有効になっている場合は、システムがすべてのパスワード変更に対してより厳密なクレデンシャル ポリシーを自動的に適用します。

プラットフォーム Cisco Prime Collaboration Deployment に関する拡張セキュリティ モード要件

拡張セキュリティ モード要件の一部として、監査フレームワークが Cisco Prime Collaboration Deployment で導入されました。監査フレームワークには、ローカル サーバとリモート サーバの両方における監査活動が含まれます。ログインセッションは、拡張セキュリティ モードの CLI コマンドの設定に基づいてユーザごとに制限されます。



- (注) デフォルトで、Cisco Prime Collaboration Deployment では監査が有効になりません。監査ログが必要な場合は、FIPS モードまたは拡張セキュリティモードになっているかどうかに関係なく、監査を有効にすることができます。

監査フレームワークと監査活動

監査フレームワークの一部として、Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションからログイン監査詳細を設定できます。

次のオプションの中からこれらの詳細を設定できます。

- [ログアウト (Logout)] ボタン
- [電子メール通知 (Email Notification)] ウィンドウ
- [NAT 設定 (NAT Settings)] ウィンドウ
- [ディスク領域の設定 (Disk Space Configuration)] ウィンドウ

- [監査ログ設定 (Audit Log Configuration)] ウィンドウ
- [ログオンメッセージのカスタマイズ (Customized Logon Message)] ウィンドウ

上記オプションのいずれかの監査ログを設定した場合は、フィールド値の更新によって、ローカルサーバまたはリモート syslog サーバへの監査ログがトリガーされます。監査ログ活動の例には、ログローテーションの有効化、最大ファイル数と最大ファイルサイズの設定、およびログファイルの追加と変更の設定が含まれます。

プラットフォーム Cisco Prime Collaboration Deployment に関する拡張セキュリティモード要件

コマンドラインインターフェイス (CLI) を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment の拡張セキュリティモードを有効にすることができます。このモードを有効にするには、ステータスファイルを作成して、アプリケーション用のスクリプトを実行します。アプリケーションは、システムの再起動時に、ステータスファイルを読み取り、その内容に応じて対応します。

Cisco Prime Collaboration Deployment が拡張セキュリティモードで動作するためには、次の要件が満たされている必要があります。

- インターフェイスのサインインプロンプトの前にサインインバナーが表示される
- コンソールサインインプロンプトの前に国防総省 (DoD) サインインバナーが表示される
- File Transfer Protocol Secure (FTPS) または File Transfer Protocol (FTP) サービスと SSH が DoD サインインバナーで設定される
- ユーザがサインオンしてさらにアクセスするまで画面にバナーが表示される
- 監査ツールが不正な変更から保護されている
- 監査レコードがレポート全体で使用される
- ユーザがパスワードを変更すると、拡張セキュリティモードクレデンシャルポリシーに基づいて新しいパスワードが検証される



(注) 拡張セキュリティモード用のクレデンシャルポリシーについては、[拡張セキュリティモード用のクレデンシャルポリシー \(77 ページ\)](#) を参照してください。

AES 経路の再暗号化

アプリケーションパスワードの暗号化と復号は、platformConfig.xml ファイルで実行されます。インストール時に、アプリケーションパスワードが Advanced Encryption Standard

(AES) アルゴリズムを通して再暗号化され、platformConfig.xml ファイルに保存されません。

サインインセッション数の制限

管理者は、ユーザごとにサインインセッション制限を設定できます。ユーザは、設定されたサインインセッション数まで、複数のウィンドウと Web ブラウザを介して Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションにサインインできます。ユーザが、設定されたサインインセッション数の制限を超えた場合は、サインインページにエラーメッセージが表示され、そのユーザのサインインが拒否されます。

管理者は、次の CLI コマンドを介してサインインセッション数の制限を設定できます。

set session maxlimit <value>

ここでのデフォルト値は 10 で、最大値は 100 です。



(注) ユーザが、設定されたサインインセッション数の制限を超えた場合は、そのセッションでアプリケーションからサインアウトして、別のセッションにサインインする必要があります。Web ブラウザでセッションが突然終了した場合、ユーザは Cisco Prime Collaboration Deployment 上の Tomcat サーバを再起動して、新しいセッションにサインインできるようにする必要があります。

最小 TLS バージョンの制御

Cisco Prime Collaboration Deployment の本リリースには、最小 Transport Layer Security (TLS) プロトコルバージョン設定のサポートが含まれています。この機能を使用して、最小 TLS バージョンを組織のセキュリティポリシーに適合するように設定します。

サポートされている TLS バージョンは TLS 1.0、1.1 および 1.2 です。デフォルトで、TLS 1.0 が設定されます。最小 TLS バージョンを設定したら、最小バージョン以降のバージョンがサポートされます。

最小 TLS バージョンを設定する前に、以下の製品が、選択された最小 TLS バージョン以降のセキュアな接続をサポートしていることを確認します。この要件が満たされていない場合は、最小 TLS バージョンを設定するときに、選択した最小 TLS バージョン以降の相互運用性をサポートしているバージョンに製品をアップグレードします。

- Cisco Unified Communications Manager
- IM and Presence Service
- Cisco Unity Connection
- Cisco Unified Contact Center Express
- Cisco Emergency Responder

最小 TLS バージョンを設定するには、[TLS 最小バージョン構成用の CLI コマンド](#)のトピックを参照してください。

クラスタの設定可能な最大インストール タイムアウト

このリリースでは、クラスタのノードの移行中に最大タイムアウト値を設定できます。以前のリリースでは、Cisco Prime Collaboration Deployment からのデフォルトのタイムアウト値は、インストールタスクと移行の両方のタスクに対して5時間でした。この制限により、移行時にインポートする大規模なデータがあるノードが Cisco Prime Collaboration Deployment 側からタイムアウトするのを防ぐことができます。

[移行先クラスタの設定 (Configure Destination Cluster)] ウィンドウ上の [インストールの最大タイムアウト (Max Timeout for Install)] ドロップダウン リストから最大タイムアウト値を設定できます。[インベントリ (Inventory)] > [クラスタ (Clusters)] をクリックして、[移行先クラスタの設定 (Configure Destination Cluster)] ウィンドウにアクセスします。移行先クラスタを設定する場合には、5～10時間の範囲で [インストールの最大タイムアウト (Max Timeout for Install)] の最大タイムアウト値を選択できます。



(注) インストール タスクの場合、Cisco Prime Collaboration Deployment のデフォルトのタイムアウト値は5時間であり、この値は設定不可です。
